早稲田學報

大正五年　第貳百五拾貳號　二月十日發行　毎月一回十日發行

本號目次

意見
師弟の情誼を敦くする一案　鹽澤理事

校報
出版部編輯長囑任＝鳩山講師の辭任＝評議員囑託＝維持員會＝紀念事業建築設計委員會＝授業開始＝科外講義＝新舊教室の使用替＝佐藤教授の京都出張＝圖書館報告
紀念事業資金寄附申込

面影
教授……新歸朝……吉田良三氏

校友會報
校友幹事會＝商科第一回卒業生會＝二交會＝城南校友會＝土浦…足尾…靜岡…岡崎…香川…和歌山…松江…小樽…宮城縣古川…長岡…福岡…臺北…新潟縣校友會の紀念樹寄贈　各校友會
早稲田倶樂部消息
校友動靜

學會
文科講師會＝中等教育研究會

學生會合
法科懸賞討論會
寄宿舍梓會
社會政策讀書會＝支那協會＝教友會＝越佐會＝正風會＝大阪同攻會

運動
運動部の寒稽古＝野球部の冬期練習

雜報
大隈首相の光榮＝大隈首相の遭難＝私立大學幹事新年宴會＝吉田北原兩氏歡迎會＝母國觀光團の來訪＝日清生命の本大學幹部招待＝同支社出張所長の大隈伯爵訪問＝野口博士の謝狀＝生稲忠兵衛氏の寄贈＝故桂井講師追悼會＝一戸講師母堂の逝去＝中西講師嚴父の逝去＝長田舊講師の逝去＝村井基金管理委員夫人の逝去＝家庭文庫の刊行

通信
米國…露國…佛國……各通信

新刊批評

東京牛込
早稲田大學校友會
電話番町五三〇〇番
振替貯金口座東京八九八六番

意見

師弟の情誼を敦くする一案

理事　法學博士　鹽澤　昌貞

今日教育界に於いて改善を要すべき事は少くないが、就中師弟の關係を親密にし、其の情誼を敦くする事は單り智育上必要であるのみならず、訓育卽ち品性上の訓練修養に於ても等閑に附すべからざる事である。殊に高等教育方面に於て師弟の關係密接ならず、從て其の情誼の如きも頗る冷淡の傾きあるを免がれざるに於いて最も深き思量を要すべき事である勿論學生の數も多くなり、從つてクラス制を行ふの止む可らざる者あり。教師は講壇に立つて一定の講義を爲す外餘力を存せざるが如き今日の狀態にありては、昔時負笈師を求むる子弟の數も多からず、自由に個人的教育を施し得たる所謂學塾學堂のそれに比して師弟の情味の薄かるべきは是れ止むを得ざる事象なるべしと雖も、併し決して其の儘放任し置くべき事ではない。何等か此の缺陷を補ふべき方法手段を講じなければならぬ事と思ふ。蓋し教育の理想は元來個人的の者であつて、教師は學問智識を與ふると共に子弟品性上の感化をも其の責任となすべきは言を待たぬ事であるからである。

之を外國の例に徵するも、往昔の教育の仕方は矢張り日本の學塾學堂と同樣に師弟の關係極めて密接に情誼も敦かつた者の樣である。卽ち英國のオックスフォード大學やケンブリッチ大學の各カレッヂ等は、其の昔は恰も我が學塾學堂の如き者であつて師弟の關係は極めて親密であつた者であると云ふことである。それかあらぬか、學生の數も多くなりクラス制を採つて居る今日にあつても幾分其の遺制面影は遺つて居る樣である。彼の各カレッヂに於いて教授學生の會食といふ事が習慣的に行はれて居るが如きは卽ちそれではあるまいか。又法律の研究所或は辯護士の養成所とも云ふべきインナーテンプル、ミッドルテンプルと云ふ樣な所にも先輩後輩の間に盛んに會食が行はるゝが如きも矢張り英國教育、昔の塾風から來て居る者ではなからうかと思はる。又聞く所に依れば、ケンブリッチやオックスフォード大學各カレッヂの教授の間には學生を自宅に招いて食事を共にするとか、或は共に散歩するとかいふ事が盛んに行はれて居るといふ事であるが、師弟の情誼を敦くする上に於いて欽すべき事であると思ふ。

獨逸の大學に就いて此の事を考へて見るのに、獨逸大學にはゼミナールといふ者があつて、或る學科の特別研究會といふべき者であるが、是れに入るには受持教授の許諾を得なければならぬ事になつて居つて、其の主たる目的は無論學術上の研究であるが、研究報告の終つた後ち教授學生共に晩餐を供にして師弟打解けて談話を交換するといふ樣な機會は少くない。自分も嘗てヲグナー教授のゼミナールに入つて經驗した事であるが、學術研究以外、同教授人格上の薰化に於いて得る所少くなかつた樣に思ふ。

又米國の諸大學に於いては、時々大講堂に學生を集めて、教授が定まつた學科以外卽ち科外講義の樣な事をやることが行はれて居るといふ事である。蓋し又一半は師弟の關係を密接にせんとの企てであらうと思はる、。

是れに因つて之を觀れば、就いて學ぶ學生子弟が多くなり、クラス制に依りて教育を施すの止む可らざるに至りたる事より生じたる缺陷卽ち個人的教育の理想を實行する能はず、從つて師弟の關係を密接にするを得ざるに至つた事に處する教育者の苦心は、英、獨、米の諸大學共に之を見るべきであつて、又相當の効果を收めつゝあること、思ふ。

我が日本にありても、近來師弟の關係密接を缺き、情誼日に薄らぎ行くの傾向あるは近代教育制の止む可らざる事象に屬すとはいへながら、其の教育上の一大缺陷たるは論を待たぬ事で、何等か此の缺陷を補ふべき方法手段を講ぜざるを得ざること前陳の如くなれば、現に教育に當る者の決して等閑に附し去るべきことでなからうと思ふ。

仍て思ふに、知識的方面から云へば特殊の研究會を起して教授が之を指導するとも必要であらう、又クラス會や各學科の學會を開いて相互の研究聯絡を計るも結構であらうが、師弟の關係を親密にし、其の情誼を敦からしむるには、教授學生の會食會といふ樣な者を催して、教授學生共に打解けて食事を共にしながらアカデミックな歡談清話を交換する機會を習慣的に作る事にしたらば好からうと思ふ。是れも手續を面倒にしたり、費用がかゝる樣では行はれ惡くからうから、成るべく簡單に費用のかゝらぬ樣にする事が肝要である。卽ち英國の各カレッヂに行はるゝといふ各教授が自宅に學生を招いて會食するといふ樣な事は最も望ましい事ではあるが、我が國今日の狀勢ではなか〳〵行はれ惡くい事であらうから、先づ辨當飯を食ふ格で、一クラス一ヶ月に一回位づゝ教授學生打寄りて會食する。クラスの人數が多ければ二回に分けてやるといふ樣にしたらばやれぬ事はなからうと思ふ。斯くして教授學生胸襟を披いて會食することの機會を作ること、ならば、其の間個人的の要求や、クラスの要求なども容易に知ることが出來、又之を滑かに充すとも出來る樣になつて、知識上學術研究に於いて有益なるのみならず、人格上訓育感化の點に於いても大に益する所があらうと思はる。卽ち今日一般教育殊に高等教育の缺點たる殺風景な講義や注入的な教育をして、自修的に研究的に而かも情味津々たる者あらしめ、且つ師弟の關係をして親密ならしめ、其の情誼を敦からしむるに於いて裨益する所決して尠からざるべしと思はるゝのである。

此の事は教授學生の間に於いて必要なるのみならず、學生同士の間に於いても極めて望ましき事であると思ふ。卽ち獨逸大學に於けるフライン（學生の組合）米國に於けるフラッターニティー（學生の團體）といふ樣な者を組織して、親友同士が定期的に寢食を共にするといふ事は其の研學上に於いても亦品性陶冶の上に於いても有益なるべきは、之を我が昔の所謂塾生、館生等の間に見るを得たる親交磨勵の事實に徵しても容易に之を知るを得べきであらうと思ふ。

兎に角此の會食會の事は我が早稲田大學に於いて、學術研究上の爲め又教授學生間の親密を計り情誼を敦くする一案として、早晩之が

實行を工夫して見たいと思ふのである。

校報

◉出版部編輯長囑任　教授兼校外教育部幹事青柳篤恒氏に本大學出版部編輯長を囑任せり

◉鳩山講師の辭任　講師法學士鳩山一郎氏は今回辭任せられたり。

◉評議員囑託　地方校友會の選擧に基き左記の通本大學評議員を囑託せり。

富山縣校友會選出　西田源次郎
靜岡縣校友會選出　伴野　賢造
同上　横田保兵衛

◉維持員會　去る一月二十五日午後一時より應接室に於て開會。天野學長、鹽澤、田中(穂)田中(唯)三理事、高田、中島、增子、金子、阪田、安部、各維持員出席。前田幹事、佐藤秘書列席。左記事項を決議報告の後午後三時散會せり。

決議事項

一、小川重吉所有地購入の件
一、坪谷善四郎所有地交換の件
三、片上留學生戰時異變の爲め學資增加の件

報告事項

一、鳩山講師本月十日辭任、三瀦講師を其後任となす事
二、來月六日中央校友會例會を開き、澁澤基金管理委員長を歡迎する事
三、紀念章に關する件
四、大典紀念に關する件
五、地方校友會選出の富山縣西田源次郎氏靜岡縣伴野賢造氏、横田保兵衛氏評議員囑託の件
六、吉田教授昨年十二月二十五日歸朝、木學期より授業擔任の件

◉紀念事業建築設計委員會　一月十八日午後一時應接室に於いて同委員會第一回開催折柄病氣缺席の市島委員長を除く外一同出席。協議する所ありて散會したるが自今毎週開催の筈なり。

◉御大典記念事業
資金寄付申込(續前號)
(自大正五年一月一日至同三十一日)

一金壹千五百圓　山口吉郎兵衛君　大阪
一金壹千圓　河崎助太郎君　同
一金壹千圓　石川　照勤君　千葉
一金參百圓　大谷　光演君　京都
一金參百圓　井上辰九郎君　東京
一金貳百圓　淺野　應輔君　同
一金貳百圓　辰野　金吾君　同
一金貳百圓　上島　長久君　同
一金貳百圓　渡邊雅之助君　同
一金貳百圓　若林　成昭君　同
一金壹百參拾圓　藤山　治一君　同
一金壹百圓　三島三郎兵衛君　大阪
一金壹百圓　石田常太郎君　廣島
一金壹百圓　早瀨太郎三郎君　同太三君　大阪
一金壹百圓　多川　信治君　東京
一金壹百圓　堀田　正由君　同
一金壹百圓　手塚五郎平君　栃木
一金壹百圓　羽田　智證君　東京
一金壹百圓　丸田　可平君　京都
一金壹百圓　岡安　理平君　福岡
一金九拾圓　渡部　任君　爪哇
一金八拾圓　小室　靜夫君　東京
一金六拾圓　黑澤　昇治君　愛知
一金五拾圓　金光三代太郎君　岡山
一金五拾圓　佐藤　正君　東京
一金五拾圓　飯島佐志郎君　朝鮮
一金四拾圓　市村鑽次郎君　東京
一金四拾圓　尾上　八郎君　同
一金四拾圓　保科　孝一君　同
一金參拾五圓　鵜田良之輔君　朝鮮
一金參拾圓　堀　貞君　大阪
一金參拾圓　於勢　昇君　同
一金參拾圓　森　太三郎君　同
一金參拾圓　山田芳三郎君　同
一金參拾圓　奥村松太郎君　同
一金參拾圓　中澤　權藏君　東京
一金參拾圓　朝倉　希一君　同
一金參拾圓　子爵木多　忠敬君　同
一金參拾圓　八木　辰守君　福島
一金參拾圓　佐藤吉六郎君　栃木
一金參拾圓　松岡　義正君　東京
一金參拾圓　竹内喜重郎君　福井
一金貳拾五圓　山口　衛君　大阪
一金貳拾五圓　芦田　安一君　同
一金貳拾五圓　野村　吉造君　栃木
一金貳拾壹圓　大村　清君　兵庫
一金貳拾圓　西尾　謙吉君　大阪
一金貳拾圓　伊藤　孫作君　同
一金貳拾圓　森田　武雄君　同
一金貳拾圓　田中　忠治君　同
一金貳拾圓　濱中　延吉君　同
一金貳拾圓　杉浦　義春君　兵庫
一金貳拾圓　大矢　史朗君　同
一金貳拾圓　大井　正巳君　同
一金貳拾圓　藤井　信君　東京
一金貳拾圓　大塚　光治君　秋田
一金貳拾圓　石川　賴一君　支那
一金貳拾圓　二木　千年君　佐賀
一金貳拾圓　藤井　祐正君　京都
一金貳拾圓　神谷　亮平君　愛知
一金貳拾圓　森　經純君　東京
一金貳拾圓　三好　正次君　大阪
一金貳拾圓　堀　吉次郎君　兵庫
一金貳拾五圓　關谷芳太郎君　同
一金貳拾五圓　遠藤麟太郎君　同
一金貳拾五圓　中瀨　精一君　同
一金拾五圓　國分　義一君　東京
一金拾五圓　岸木　康通君　佐賀
一金拾五圓　形田卯傳次君　大阪
一金拾五圓　大橋　周次君　同
一金拾五圓　田中政右衛門君　同
一金拾貳圓　植野　包吉君　東京
一金拾貳圓(改メ)　赤保木寅之助君　愛知
一金拾圓　石橋　信雄君　大阪
一金拾圓　門田　康記君　同
一金拾圓　柏木　潤三君　同
一金拾圓　遠藤　剛三君　同
一金拾圓　阿部　直造君　同
一金拾圓　園生湖太郎君　同
一金拾圓　今井　敏行君　同
一金拾圓　村上悌次郎君　同
一金拾圓　鹽田　敬吉君　同
一金拾圓　水品　元吉君　同
一金拾圓　後藤作次郎君　同

一金拾圓　佐々木文作君　大阪
一金拾圓　寺澤　直人君　同
一金拾圓　綿貫　和夫君　同
一金拾圓　大柴龜太郎君　兵庫
一金拾圓　朝比奈九郎君　東京
一金拾圓　西尾　尙夫君　栃木
一金拾圓　江指　盛一君　兵庫
一金拾圓　野津　醇君　同
一金拾圓　川野　義正君　同
一金拾圓　長谷川孝太郎君　大阪
一金拾圓　中村　豐雄君　同
一金拾圓　玉置　英三君　同
一金拾圓　町田　三郎君　埼玉
一金拾圓　弓削　重治君　岐阜
一金拾圓　吉田　敬一君　福岡
一金拾圓　稻田　信次君　同
一金拾圓　太田　完一君　同
一金拾圓　草野　清君　同
一金拾圓　嫗野　繁則君　北海道
一金拾圓（改メ）　寺部　治助君　愛知
一金拾圓　高島　徹君　廣島
一金拾圓　川原田政太郎君　東京
一金拾圓　上田正太郎君　同
一金拾圓　別宮晉五郎君　同
一金拾圓　脇坂　良麿君　同
一金拾圓　廣池千九郎君　奈良
一金拾圓　岩井力三郎君　千葉
一金拾圓　樋口慶次郎君　栃木
一金拾圓　西岡　清君　同
一金拾圓　金子　木作君　同
一金拾圓　大久保清志君　同
一金拾圓　大澤　定正君　同
一金拾圓　山崎　忠純君　同
一金拾圓　宗方哲太郎君　同
一金拾圓　鶴島　茂君　同
一金拾圓　加藤榮太郎君　石川
一金拾圓　小野　貞雄君　臺灣
一金拾圓　下村　正治君　大阪
一金五圓五拾錢　松田　谷三君　兵庫
一年五圓　池田　省三君　大阪
一金五圓　奈良　秀治君　同
一金五圓　高橋　謹爾君　同
一金五圓　片岡　忠雄君　千葉
一金五圓　小山　忠君　兵庫
一金五圓　中島　敬三君　東京
一金五圓　長田　宜君　長崎
一金參圓　尾崎　雅次君　兵庫
一金貳圓　野崎　靜夫君　同
一金貳圓　牧　武一郎君　廣島
一金貳圓　佐藤　貞二君　兵庫
一金壹圓　相原和一郎君　愛媛
一金壹圓

計金八千百貳拾參圓五拾錢

一金壹千九百拾四圓貳拾參錢　在學生

內譯

▲大學部政治經濟學科

第一學年

一金貳圓宛
小林謙二郎君　飛鳥井雅信君
一金壹圓宛
篠田悠三郎君　木村　正雄君　漆原　雄象君
張　景軾君　山本　五郎君　中村　次郎君
山崎　忠雄君　長谷川武吉君　犬塚　吾一君
岡村　二一君　漆原　久雄君　掛田　郁郎君
片岡　寶重君　饒村　義明君　安食　義憲君
西田五一郎君　劉　達麟君　前原賢太郎君
荒井　兼吉君　小林　正義君　陳　德良君
富井　常臣君　大熊金次郎君　片口安之助君
辨官　爲秀君　山根　周治君　大高　正雄君
堀江　武治君　成田稻三郎君　山脇　虎彥君
齋木政太郎君　大泉　甲造君　田上　友治君
柿崎　嘉雄君　松原　常盤君　南部　要君
中川　榮一君　大久保清藏君　桝永　靜衞君
大森　元君　板垣　明君　太田弟二郎君
吉野　敬三君　中澤　茂君　梁　鐘　淑君
河井常三郎君　正山　三郎君　堀見　潛鰐君
李　翰　章君　堀口　功君　吉田　勝君
伊藤　博文君　道盛吉之助君　新里音三郎君
河合　往君　大坪　徹心君　松任　克巳君
角田　文雄君　高木　登君　横田愛三郎君
飯塚　久義君　土肥　主稅君　池宮　末吉君
富岡松太郎君　片岡　光一君　牛島禎太郎君
內田　友三君　久德　高光君　駒澤　鐵三君
平井　實造君　小倉　良俊君　柏倉　照夫君
野村　正雄君　保田　眞作君　黃　毅君
櫻井幸次郎君　齋藤　軍次君　小林　寶君
小林彌重太君　橋本　求君　加藤　弘君
後藤鐵次郎君　加藤　周君　柴　三郎君
吉田　三郎君　小田切　孝君　松原　敏一君
橋本　恭平君　今井　孝暉君　堀內　修平君
宮崎　震作君　澁川　正治君　佐藤　興君
石橋　久雄君　赤尾　英治君　佐藤　久隆君
須東　忠三君　石井　仙治君　荒木　章君
鈴木　和藏君　山本彥四郎君　立花　貞壽君
唯根　昇君　柳瀨　道雄君　田沼　武君
李　培　蕃君　竹谷　圓藏君　陳　濟君
橋本　利政君　吉野　盛義君　清水源一郎君
池田　重明君　松木時三郎君　石川　勝治君
西村道太郎君　林　勝久君　坂田德太郎君
檀　博君　長岡　久吉君　那須善五郎君

同上　第二學年

一金參圓宛
高木　貞雄君　矢野　穰君　牧　湊君
一金貳圓宛
飯塚　知信君　宮島　博君　福島　幸治君
神田寅之助君　川北　磯助君　菊池　哲春君
福邑　義生君
一金壹圓五拾錢
小川兼四郎君
一金壹圓宛
松田　昇一君　野田市三郎君　牧野　愛吉君
增田　鑑蕓君　野尻　藏也君　糸數　盛廣君
原　義雄君　松原小一郎君　福田德太郎君
相子　一郎君　久野　三止君　勝田友三郎君
佐藤　武雄君　豐村　與君　松井　周次君
西尾　龍平君　村田松太郎君　無津呂一郎君
小林　平次君　堀江　宏君　赤壁德三郎君
山本　克巳君　森木　蕭明君　鈴木　歲君
古川不二雄君　山木新一郎君　有近　與隆君
諸遊　康英君　上田　紫朗君　河野　忠一君
宇田川政吉君　道盛龜之助君　橫井元一郎君
鈴木　良運君　山田　純忠君　佐々木馨一君

同上　第三學年

一金壹圓宛
磯前參治郎君　殷　汝　耕君
井上啓一郎君　岡谷喜三郎君　渡邊　有仁君
春田　登君　津神　重雄君　永川　俊美君
涌島　季俊君　村山　善治君
中野登美雄君　永江　清君　小西　利雄君
內田清三郎君　不破　爲治君
阿波喜太郎君　菊池　寬三君　島崎　貞三君
須藤　哲三君
一金五拾錢宛
山本　治郎君　石原經太郎君　鳴海清二郎君
中村　甚一君　松枝　德麿君　堺田　顯治君

▲大學部法學科　第一學年

一金壹圓宛

櫛淵　仲吉君　椎名　延君　山本　信政君
五十嵐三郎君　猶塚　半治君　織田　正澄君
古谷　齊君　中村　一英君　新宮　武治君
赤須　文吾君　鈴木彌太郎君　松岡　正三君
織田　和勝君　深川　七藏君　廣瀬　徹君
福井　親君　稲垣　一雄君　渡邊　俊一君
越宗　壽雄君　渡邊　甕男君　加茂與三郎君
山野　節三君　四宗七郎君　江淵　俊秀君
三島　健三君　松本　元君　森内英太郎君
松尾　章男君　伊達　光美君　海老塚　君
山本　辰一君　市村　昇司君　伊藤　六郎君
岡村　衛君　池田　直紀君　笹川加津惠君
萩原　盛夫君　河野　均平君　小島　喜六君
高橋藤四郎君　種市　良寶君　高橋　勇惠君
宗像　熾君　笠松　右雄君　石井　佐仲君
秦　英吉君　持田　健君　坂入　久雄君
大濱　信泉君　田沼　武兵君　松田　義雄君
小林　茂貫君　相原　利貞君　山本　文平君
谷村　正男君　田中　政助君　武田道千代君
鷲見　甚造君　陳　紹　仁君　秋本　元男君
小池善之助君　篠原亮三郎君　二瓶　治夫君
小山　胖君　吉田　春夫君　深瀬　安和君
島田　傳君　今田　四郎君　竹内嘉平治君
新谷準一郎君　井上　順次君　村主金三郎君
長野小伊三郎君　渡邊喜三郎君　太田　輝雄君

同上　第三學年

一金壹圓宛
高木　常七君　小笠原辛彦君　小瀧　辰雄君
福田　勝弘君　内田　喜雄君　曾我　豐君
不二　良一君　山本久次郎君　雛波　虎雄君
森　勝次君　高木　秋雄君　小原　玄之君
藤井　卓君　樺島　信福君　和田　正吉君
石川　洸君

▲大學部文學科　第一學年

一金壹圓
永野　幸平君　永谷　勝君

同上　第二學年

一金六圓
岩下　三郎君
一金參圓
大河内隆弘君
一金貳圓宛
小川　敏也君　宮澤　隆胤君
一金壹圓宛
山口　英男君　丸地　倫二君　河合　孝次君
秋元　宇平君　小出　有三君　近藤佐五郎君
山本　直一君　金築　妙峰君　青柳正太郎君
須賀　憲二君　永田　衡吉君　横川　重次君
一金五拾錢宛
國分　末三君　大庭　武市君

同上　第三學年

一金壹圓
右田左武雄君
一金五拾錢宛
宮澤　末男君　楠　茂市君　國司　政眞君
谷　橄　六君　砂川　一平君　豐田　大哲君
野口源之助君

▲大學部商科　第一學年

一金拾圓
吉田　待郎君
一金參圓宛
中島　傳吉君　長岡　貞一君　小林　茂君
赤澤虎之助君　住永　惇二君　伊東　六郎君
鈴木喜一君
一金貳圓宛
水内日出高君　小川　猛君　田中　賢治君
武井辰五郎君　松浦　長治君　藤本　鼎三君
小泉　啓三君　小峰儀三郎君　小木　曾武君
綱野　和一君　阿部廉太郎君　盛田　秀平君
岩波　春海君　小林　嘉吉君　出口　眞言君
久保田德甫君　野口　正嘉君　諸戸　一郎君
永井　寛君　太田　矩雄君　山口　重秋君
關根　清三君　松岡　久治君　溝淵　松藏君
安岡　男喜君　白石　二郎君　佐藤　敏雄君
室塚　鐵二君　清水　喜一君　大庭　愼二君
大森　喜六君　土井　眞澈君　羽田常三郎君
小原　悌吉君　井上善三郎君　皆川　武雄君
佐藤　武雄君　市川　末松君　若松　修一君
藤田　眞君　松田　種三君　森岡　榮一君
吉原福三郎君　牧　善三郎君
一金壹圓五拾錢宛
加藤　五郎君　瀧濵作太郎君　田阪　茂忠君
青木　剛君　菊池安二郎君　入江　昌二君
後藤　健三君　新谷　賦君　原　義一郎君
一金壹圓貳拾錢
一金壹圓宛
小山謙三郎君　二之宮謙吉君　野尻陸一郎君
岩佐　精一君　入江　千壽君　岩倉　文祐君
稲村　堅士君　今宮芳太郎君　井口謹一郎君
岩田　武秀君　石橋　正德君　石倉　捨藏君
市原　俊雄君　伊藤　進君　飯村　俊雄君
林　鶴次郎君　長谷川銭次郎君　馬場　惣一君
星野　英夫君　沖中　恒幸君　小澤榮三郎君
大和田　稔君　大山　友次君　大野象三郎君
尾澤平一郎君　岡村　勇二君　大竹　新吉君
大上　正一君　苧谷　盛一君　小竹　忠一君
尾崎　孝吉君　上垣内新一君　神谷　忠夫君
金澤　雅志君　川島　剛一君　吉村　貞一君
高橋佐久郎君　田中　昌平君　高山　米吉君
高濱　浣治君　中村　英祐君　成田錠之助君
永山　幸一君　中澤　信助君　中宮　五一君
中之庄谷三次郎君　村山　靜雄君　村上　庸雄君
上坂　一雄君　上杉　博次君　上野　龍雄君
野田　保男君　野中　藤作君　野村　義彦君
日下吉太郎君　山邊　二郎君　山口　一郎君
山岡醇一郎君　矢島　敏雄君　山田　敬爾君
矢吹三龜男君　安田　正巳君　牧野　繁君
松原　敏夫君　増田幸二郎君　松本　秋造君
卷口　一治君　福田幸太郎君　藤井　仙吉君
後藤　光和君　小出　隆君　遠藤　修君
寺澤增太郎君　淺羽　茂興君　尼崎　康一君
阿部　直通君　芦田　秀雄君　綱塚德次郎君
天本二七郎君　崎田庄三郎君　佐藤　善次君
喜多川悅三君　貴堂鐵次郎君　宮下誠太郎君
宮下　秀一君　清水　勝君　志道　健治君
柴田　勝君　白井伊之助君　驪野　恒吉君
正畑　美穀君　下見　經夫君　平峰　忠春君
平野　俊三君　平川徹之助君　森田　章君
關　基君　若林　晴雄君　金田清之助君
井關　榮司君　井上　俊吉君　上坂　西藏君
土屋　功君　森島德三郎君　藤本作太郎君
中山　榮一君　對木　留一君　河野　通憲君
原　曠君　大野　基一君　吉井　良康君
村木　清一君　黑木　常吉君　島田　秀美君
市瀨　臻君　岡島　喜一君　西尾　四郎君
谷口　太郎君　高野　敬二君　早川與三吉君
出羽　正也君　高木　一君　阿井　國藏君
大場　昇輔君　武田　基一君　齋藤　健夫君
永井　正君　中川清次郎君　須網　獲行君
兒玉　清澄君　法貴　宗一君　松本農夫也君
平井　秀造君　瀨木　博俊君　沖田　勇一君
岸　作太郎君　小林誠一郎君　松岡　正一君
中村　勝正君　岸　一郎君　井尻　芳治君
金剌　直一君　水谷淳三郎君　川久保　浩君
島原　重行君　山形　章君　笠井　善繼君
利光　正路君　中川　豐君　小杉　亦男君
卜部　退三君　佐藤　信君　奥谷　正治君
佐伯　統三君　島田　佑一君　山田辰五郎君
田中仙之助君　安井　信君　齋藤友次郎君
谷河　英次君　沼田　鐵藏君　中村　鍵壽君
竹林　誠一君　李　克　謙君　佐久島順三君
板垣　龍亮君　角谷　伊藏君　久保田敏夫君
加藤　三二君　石倉金太郎君　卯尾田毅太郎君

藤吉　灌頂君　富田仙之助君　石川藤一郎君
伊藤八十雄君　岡本　司郎君　後藤　音吉君
賀谷　爍爾君　森　勝太郎君　蟻川　章君
桑原己代治君　濱名　孝君　一杉　信雄君
于上　悌一君　前納　光三君　高士　乙丸君
竹内　春生君　大畑　耕君　加納巳之雄君
藤戸　泰介君　三枝清太郎君　鈴木　真松君
渡邊富美雄君　田口　武雄君　野澤　義則君
白石　正行君　中西　顯三君　滿所信太郎君
谷口　清次君　眞砂　新吉君

一金五拾錢宛

渡邊　幸三君　大澤　定男君　編田　清君
八田　宗平君　持田　宗治君　山崎　茂君
東間　巖君　赤鑞　退君　原　忠太君

同上　第二學年

一金五圓宛

高垣　太郎君　吉江　達郎君　相原　一雄君
島田　孝一君　今井　五六君　奥田保三郎君
田中　周衛君　松風　憲二君

一金參圓宛

玉江　文雄君　山田麟之助君　松平　親吉君
牧野　泉君　南方常太郎君　渡邊　爲人君
宇佐美占太郎君　上田　六郎君　柳澤　文三君
横山　包隆君　木村　定爾君　海野　幸保君

一金貳圓拾八錢

一金貳圓宛

岩崎　君平君　飯塚庄三郎君　服部　末男君
原田　友厚君　西岡清三郎君　西岡勇三郎君
西田　壽吉君　堀部木次郎君　富山　實君
太田　俊一君　小川小三郎君　神田　健一君
笠原孝次郎君　川手　音由君　鍵富　修三君
川瀨淳二郎君　唐澤　英一君　田村　侃一君
田内　眞能君　高原　英三君　柘植　曄君
長尾　景英君　中島　復君　宇賀　龍雄君
野村　由巳君　桑田　幸三君　久保田　實君

山根正之助君　山本　董君　牧野　由藏君
萬俵　賀一君　深川喜代治君　香西　展夫君
秋山　總夫君　櫻井彌太郎君　櫻井善兵衛君
坂内　宗一君　佐々木脩三郎君　齋藤　龍一君
紀　省三君　木谷　正朔君　鬼頭　誠君
紀伊　末雄君　宮本　俊三君　柴田　勝治君
澁谷　省治君　椎名　幸助君　篠原豐三郎君
平井　秀君　平林　俊彦君　日野原寛三君
東尾　勝三君　廣田　光威君　廣瀨作三郎君
守分　瓊三君　鈴木　新吾君　清水德太郎君
大藏　力三君　石井　孝一君　岩佐　喬一君
布居　賢一君　岡田　正夫君　小田　勝次君
大井　美松君　加藤　宰治君　橘　繁三君
田中　常吉君　高橋　久雄君　永野　榮助君
中野　松彦君　内藤　安城君　中村　秀穗君
上野　憲一君　山地　保君　山田　銓男君
藤澤　猛君　小林　正義君　佐藤　伍市君
茂木　四郎君　關塚　誠吾君

一金壹圓五拾錢

田中　道夫君

一金壹圓四拾錢

草野　頼母君

一金壹圓宛

石田　秀一君　市川源次郎君　花岡平三郎君
服部　信一君　堀内　武雄君　友田　要吉君
大場　辰三君　大谷武次郎君　岡　直二君
柿本由太郎君　川澄　一郎君　金子　彦三君
加藤　正信君　依田　藤衛君　横澤　榮君
横塚　茂平君　谷分喜一郎君　田中　淳一君
高崎　實敏君　高橋　初藏君　田中　清治君
武石　雄三君　坪田　謹三君　南木　溫君
名和庄八郎君　長野　重臣君　栗田　正治君
山崎　久作君　八代　重夫君　山田俊太郎君
船場　保君　兒玉春之助君　江田　武彦君
朝倉幸三郎君　安達　勝三君　木村　春松君
宮本　敬治君　宮田　洪一君　溝口　直枝君
三田村鎮夫君　鹿田　秀夫君　島岡　利郎君

畠野　義雄君　鈴木　半二君　加藤吉兵衛君
小林　正美君　平田圭太郎君　山田　敬三君
井關　忠敏君　井口　勝保君　岩佐　善一君
石川　秀浪君　犬飼　鍵藏君　石井　淺吉君
今成　敬三君　林田　備衛君　原田　雄次君
丹羽　正一君　西方　彌八君　堀畑　正一君
德永　代一君　鳥居春之助君　千葉　胤英君
中條真二郎君　岡　克巳君　尾見八男介君
岡崎　茂穗君　大西仁壽郎君　大和田眞雄君
小野　順治君　大塚　達君　大島　國造君
鷲野　惣一君　渡邊　平三君　柏原龜三郎君
加藤　克巳君　金井　悌藏君　武田　正夫君
武田　精三君　高橋　春一君　塚本龜之介君
根來　隆三君　長田　雄次君　長野　龍造君
中山　忠直君　長安　正夫君　中村　益雄君
中川長次郎君　室　龍之助君　上田　友春君
野口　官一君　野本　篤助君　野村　喜作君
郡司　健男君　久布白正巳君　柳田　供平君
山田　佑吉君　山崎　巖君　上田　辰吉君
松隈　一君　松本　種夫君　松本　敬治君
小林楊之亮君　近藤　政行君　小林　英三君
小松原正次君　小林　鐵二君　小林　武男君
手塚　龍彦君　淺川　和男君　江守　昭君
朝倉幸一郎君　秋山惣次郎君　猿橋　八郎君　青木　正巳君
齋藤　一二君　齋藤　功君　北村基次郎君
水野　菊一君　三上　新次君　肥田　孝君
守屋正太郎君　松原　吾策君

同上　第三學年

一金五圓宛

林　善一郎君　岸本亮太郎君　杉村　正吉君

一金參圓宛

杉本　忠直君　渡邊　茂君

一金貳圓宛

伊藤　和勝君　稲村　實君　高島　靖君
小林多平治君　淺　辰君　原田　實三君

富谷梅太郎君　土屋　喜作君　八木　知一君
小林　喜一君　福里　次作君
一金壹圓五拾錢　鈴木善次郎君
一金壹圓拾錢
一金壹圓宛
板野　利二君　岩崎　武七君　長谷川欽爾君
八馬榮之助君　長谷川富歳君　西岡　菊馬君
富田　吉藏君　小川　鐵郎君　圓城寺松一君
大谷　純三君　脇　秀男君　郭　慶壽君
加藤　清忠君　柿沼　達藏君　川邊　儀助君
吉田　米吉君　瀧　侃二君　高橋　龜吉君
橘　山人君　谷口純一郎君　高島　豐君
谷口　國守君　辻　德四郎君　中島　孝夫君
永田巳代次君　中村　貫三君　中田　浩君
仲井由太郎君　中村　行道君　中川　政信君
永田　辛一君　村田利三郎君　内海　快二君
宇田　惣吉君　海部　二郎君　野末要三郎君
野口　亮君　山田　正君　松浦　進一君
丸山　源吾君　松村春次郎君　松谷　彌一君
松本　三郎君　古屋精一郎君　近藤又市郎君
小泉　邦治君　小西　次郎君　江崎　廣君
寺田　定治君　天野　康夫君　新井　錤一君
東　清重君　淺野旭太郎君　佐原　英介君
北村房三郎君　木村　節君　木村友之介君
白神磯太郎君　平山　忠善君　廣戸　武吉君
仙波潤一郎君　杉本　貞一君　須田　孝壽君
黒澤林三郎君　吉田　次雄君　朝日　厚君
式　正次君　井上　豐二君　石渡　熊藏君
稲津　秀光君　稲葉　愼三君　長谷川謙六君
原田　重德君　西澤　眞三君　西川　進君
星野　銀伍君　時田　幸治君　戸田　豐君
小田切金治君　岡本　尙君　渡邊　八郎君
大城　長助君　笠原道太郎君　掛下龜二郎君
川村　實君　唐澤　能雄君　和田忠一郎君
加島　亨君　高塚　康平君

武市長次郎君　高貴卯三郎君　高橋　玄吉君
高木信太郎君　谷口勘次郎君　瀧澤　茂君
高木鐐四郎君　高智　渉君　土屋　實造君
土屋　正房君　筒井清太郎君　長沼　正文君
中原　眞一君　内藤敬次郎君　長平　信夫君
中川　豐次君　中村　輝雄君　村上　幹二君
漆原晨九郎君　植田　平一君　能任理佐久君
野村正一郎君　能谷　貞次君　草皆　久治君
山本重太郎君　山本　又雄君　人往　俊一君
矢橋　順三君　矢野　剛君　山本　亘君
山崎　浩君　矢田健次郎君　福田　由治君
蔔　義男君　飛鳥金次郎君　淺野　勝利君
廡生　純君　荒井鎌次郎君　酒井　億尋君
佐々木辰雄君　齋藤政一郎君　佐瀬　正男君
齋藤健次郎君　貴堂彌十郎君　三谷長太郎君
宮田　誠君　平尾　康雄君　森下　政一君
鈴木文一郎君　金丸親太郎君　香川　浩三君
吉川　清次君

一金五拾錢宛

治部　茂君　酒井　龜治君

▲大學部理工科　第一學年

一金壹圓宛

三好　貫一君　清野　秀丸君　菊池　恒中君
緒方　一三君　高橋　三郎君　大川　勇君
吉野治郎八君　八島　知君　鈴木　彌吉君
岩谷　英男君　松ノ井覺治君　竹中　保壽君
峰　好次郎君　配川　常雄君　須賀　陸君
高田　常一君　松澤　一松君　佐藤　桂次君
手東武之助君　布村　常勝君　角屋　信一君
田中　周二君　村野　藤吉君

一金五拾錢宛

太田藤太郎君

同上　第二學年

一金參圓宛

後藤　曠二君　杉浦　啓二君

一金貳圓宛

大原　繁君　高田　勇雄君　都築　謙雄君
ピ、デー、バガット君　エス、エム、カマーン君　川又　孝君

一金壹圓五拾錢

石津　美基君　原田　實君　西田　俊一君
仁瓶　武男君　岡野　董君　川名忠兵衛君
多賀　叔男君　谷　快亘君　高橋　正次君
中尾　音吉君　中山　本麿君　長坂　友藏君
上田　勝君　上野　貢鎮君　山田　節君
山口　逢君　安永　次郎君　舟崎　由之君
阿部　秀麿君　佐々木秀綱君　三宅　隆一君
中野　正夫君　野々山整一君　前田　三郎君
小湊　信夫君　木下　善壽君　井田信太郎君
猪野　令宣君　伊藤　義麿君　井上　忠太君
石田　勝榮君　羽木　貞雄君　原野鐵太郎君
原島善四郎君　早川　榮吉君　半田　宗一君
丹村熊次郎君　豐田　元實君　富田友之輔君
富澤　生壽君　陳内　文城君　小川　芳邦君
小田　岩藏君　大橋善次郎君　小川由太郎君
若林　豐君　葛西　民也君　河津　泰三君
河野　重藏君　片岡　清君　風間　乙也君
柏井　光彦君　楊　績　熙君　米澤　秀一君
吉成　春吉君　横尾　巽君　田中　智君
高橋　幸士君　高橋慶之助君　高木　孝三君
竹林磯次郎君　武田晴四郎君　立石猪三郎君
中田要三郎君　中村　忠雄君　中山　保君
中島　省藏君　村上　雄吉君　上田　輝雄君
黑田傳三郎君　鯨井　退藏君　矢田　芳造君
山地　勇君　山本市良次君　山本　泰君
山口　素信君　前坂重太郎君　松田　旭君
松本　岸三君　藤原　忠治君　小林　一茂君
小松重次郎君　寺師英麿呂君　穴山　義次君
淺野　賢智君　淺倉　俊景君　佐藤　靜雄君
佐伯　赳夫君　佐々木五郎君　南慶　治郎君
三富　一郎君　溝口源太郎君　島立　令德君
比村　發君　毛利　喜明君　森　九十郎君
森　秀雄君　松原美佐雄君　田代田三郎君

同上　第三學年

一金貳圓

一金壹圓五拾錢

原　隆成君　山口　巖君

一金壹圓宛

石澤　諭吉君　西島　源次君　小山雅太郎君
小笠原義之君　大綱善太郎君　中島英一郎君
降旗　音吉君　海老塚嘉右衛門君　鳥居　武君
根本　嘉君　中村　功君　澤島　政平君
志村朝次郎君　東谷　文平君　土屋豐次郎君
新田　憲弘君　千葉　清一君　成瀨　一郎君
井邊　一雄君　伊藤　義一君　原田　卷吉君
林　元一君　小野　直彦君　小鹽　健吉君
太田　周平君　岡田　亮三君　和田　宗武君
渡邊　猶作君　渡邊　榮雄君　隆山　良一君
笠原　照普君　横田　精一君　横山　貞雄君
横山　康平君　吉田　賢治君　田中　奠君
田邊　一雄君　田口　大介君　高山　安根君
高宮光太郎君　成清　政榮君　中村　郁郎君
中島　毅一君　海野　幸秀君　工藤　彰君
久世　敏正君　黑岩佐武郎君　黑川兼三郎君
桑原　義一君　倉田長右衛門君　柳田美津男君
山田　義一君　山田大路元威君　山本　義一君
山本　榮藏君　馬淵　潔君　松岡　則章君
福田　敬也君　藤本　精一君　藤本　菊一君
小針　龜松君　河野　功君　榎本　幹長君
有馬　悌二君　青江　隆二君　青木　勝平君
佐藤　信一君　佐藤　四郎君　木原　三君
北原　四郎君　北澤　義男君　三浦　順一君
白濱　知寛君　島田　勉君　廣瀨正一郎君
平岡　敬藏君　平島　貞明君　須田春之進君
助川　貞利君　曲木　貞周君　岩井　正孚君

▲專門部政治經濟科第一學年

一金壹圓宛

阿部　溫君　磯部　眞雄君　田中　茂二君
大室　壯一君　松本　敏雄君　齋藤　登作君
近岡平四郎君　籠田　辰昌君　佐藤　雄也君

一金五拾錢宛

上村　正義君　村本　計君　今井　歸一君
谷　信忠君　伊藤　文雄君　藤田享二郎君

同上　第二學年

一金貳圓宛

堤　茂夫君　平賀　文男君　富永　悅三君
天羽　靜一君　吉田　秀君

一金壹圓五拾錢

一金壹圓宛

和田　積君　菊池　省二君
西村　新助君　矢崎　豹三君　瀧　國雄君
大野　禎君　今關　節二君　杉浦　武夫君
山口　成孝君　川崎　信夫君　奥田　秀彦君
須藤　芳雄君　丹尾磯之助君　遠藤　民夫君
小池　輝男君　鬼頭喜三郎君　大野熊一郎君
稽古庵　修君　木村　直文君　高森幸太郎君
眞藤　虎一君　柴戸盛二郎君　加藤專十郎君
山崎　福松君　河田　正澄君　加藤　重之君
渡邊　和治君　浦部　德一君　德永　喜一君
木村　堯君　鈴木　善作君　宮島　鴻君
中西　雄洞君　松本　新君　野見　軍治君
成田元四郎君　加藤　歡作君　水野　由三君
上代　勇君　伊野部恒吉君　和田　清治君
加藤　新君　三河　彦槃君　三好　胖君
松尾　虎五君　中村　政一君　季　明　圭君
井上五五郎君　山崎　幸一君　久保田　勤君
武石　三郎君　渡邊治右衛門君　三津間　薩君
青木　三郎君　山田　芳吉君　長谷川亮三君
阿野　文男君　赤羽　明治君　小川　金吾君
西田　優一君

齋田　秀三君　岩井　清水君　久保　猛男君
有川　正吉君　飯塚　愛造君　中野　震藏君
片山　誠三君　本間　勇吉君　玉田新太郎君
左近光靖雄君　中川　清平君　新井　宗一君
中河　賴覺君　相澤日生男君　野口　爲義君
大谷　敏之君　根津　邦平君　結城恂太郎君
石黒　一郁君　鈴木　明良君　瀧田　誠君
大久保茂七郎君　福井龜久夫君　名村　太郎君
伊達甚太郎君　成瀨　慶治君　渡邊金三郎君
松井　通君　里兵右衛門君　田畑　亮三君
佐野　廣中君　趙　邦楹君　永井　王一君
更井　理作君　坪谷多計麿君　中村　幹雄君
三木　將雄君　張　丙南君　豐田　兼助君
元　潤　田君　沈　騰君　蔡　國　珍君
倉智　秀雄君　喜々津前義君

一金五拾錢　同上　第三學年

一金五圓　劉　明　哲君
一金參圓　田中啓次郎君
一金貳圓宛
陳　恒　榮君　金　纘　洙君　諸橋　守次君
一金壹圓拾錢宛
黑井　梧樓君　虻川　丹治君
一金壹圓宛
植木　茂一君　飯澤　肥一君　室伏光太郎君
星崎敬太郎君　尾立　維昌君　石野藤太郎君
伊藤　五郎君　岩瀨　有一君　稻垣竹一郎君
石田賢一郎君　樓牛　新君　原田　篤久君
濱島　傳吾君　錦織　信君　堀川　尙二君
本多　助信君　本間清一郎君　堀野　眞一君
富原　廣君　尸谷　章君　遠間　富平君
德元　八一君　張　秀　琛君　張　士　傑君
陳　仁君　李　柏　存君　小田　辰三君
大岡恒次郎君　小原與一郎君　太田　守男君
太田　勇君　小澤　清君　王　文　炳君
王　照　青君　岡田　稔君　渡邊眞之丞君
河瀨　敏男君　笠井寛太郎君　河本　信幸君
米山　勳君　揚　品　奎君　吉原　武嗣君
吉田　勇君　田中　辰治君　殷　登　名君
角田　强哉君　土屋　晴君　長尾清一郎君
永松　健一君　中島　四郎君　中里治兵衛君
永井　助藏君　羅　文　光君　內山　慶一君
能美　逸雄君　楠瀨　壽君　桑原　盛次君
山本篤一郎君　山本　好一君　矢倉岩次郎君
山村　瀧造君　山田金次郎君　槇尾　學治君
正木　蔚君　福岡圓太郎君　藤田喜太郎君
藤尾鐵太郎君　小高　二郎君　小貫　太郎君
江原　憲吉君　淺見　振吉君　佐々木辰雄君
相良　完君　三枝　忠二君　櫻井　寅雄君
喜多　一重君　蒟池彌三郎君　水卷　傳吉君
峰越　辨治君　水屋　康吉君　宮川貞一郎君
柴田　德治君　島崎　一郎君　徐　樹　人君
平塚周一郎君　千田　憲三君

▲專門部法律科　第一學年

一金壹圓宛
楠野　賢逸君　江川　金吾君　田村　直記君
一金五拾錢宛
飯田　操治君　水上藤右衛門君　鈴木孫三郎君
伊藤格太郎君　家坂　守吉君　田中　英治君
八島　銀七君　宮西　耕一君　野口　寛君
幡谷　廣君　諏佐　照吉君　兒玉　行清君
武內　常太君

同上　第三學年

一金壹圓宛
岩村銕次郎君　伊藤竹次郎君　今西　莞爾君
今村　實君　伊藤　文一君　橋本　正君
近岡忠次郎君　荻野　巖君　尾崎長太郎君
片桐綱三郎君　吉野　京太君　吉永　半平君
竹之下英三君　竹中　正雄君　高田兼太郎君
高瀨　清毓君　谷口富士男君　竹平　治作君
中野　作樂君　中田　武男君　中川國太郎君
上野　利吉君　栗山　武俊君　山田　孫三君
山田　正文君　山尾　甫君　松田　麒造君
今朝丸好太郎君　古谷　正造君　藤谷　清一君
小山　彥彌君　小平　米雄君　佐藤　太郎君
犀川　長作君　北山　雄造君　岸本　丑松君
北田　寛君　徐　永　銖君　島川　進君
東出快次郎君　瀨良　泰治君　菅野久五郎君
鈴木　廣助君　鈴置　太郎君　黑瀧寅之助君

▲高等師範部第一部

第一學年　東鄕　泰介君

一金壹圓五拾錢
一金壹圓宛
後藤　孝一君　飯岡岩太郎君　市村　清君
池內泰三郎君　今井　忠利君　和泉　健治君
石田　千克君　伊藤　演治君　石井　晃君
長谷川武智君　林　踏雄君　濱中　正淳君
新安　武雄君　四山　和一君　堀江　眞澄君
岡田甚四郎君　小野　精長君　大野　德松君
小野　利彥君　小野　定爾君　岡野　光治君
小倉　清壽君　小川　越君　柏木　永一君
加藤　正午君　勝內　義昌君　武市寅五郎君
田所　國輝君　田中十三郎君　塚原格之助君
中路　正衛君　長島　勝藏君　六戶部幸義君
浮田　秀正君　內野　江一君　宇治田種雄君
野平　一夫君　野中　新平君　隈部　義人君
久保　繁君　倉富　堅吾君　山本　武君
山口　直平君　松林　則司君　馬鳥房次郎君
松本　敏三君　又吉　康和君　深堀惣三郎君
古川　綠郎君　福村　安彥君　吉田　重男君
小林　宗重君　小林富三郎君　小林文二郎君
後藤　正策君　後藤　孝一君　小山　巖君
小菅　笑君　古賀　吉郎君　小林　晴君
青木益太郎君　淺井　正純君　青山上三九君
青木　松壽君　山段永太郎君　佐野格之介君
齋藤　芳光君　眞松佐次郎君　佐野　佐君
三津川　屯君　宮澤　馨君　水智　立覲君
醋谷　丈夫君　重松　善一君　志賀誠三郎君
日比　正夫君　井出　鎌一君　樋口　清君
李代　公平君　鈴木　與作君　杉山　茂吉君

一金五拾錢宛
鈴木　讓君　井上宗四郎君　井上幸次郎君
今泉　七郎君　原　長助君　星野　孝平君
前田　莊一君　藤崎　倭人君　藤井　啓一君
松浦縫之助君　五月女傳一君　菊池　省三君
島田　祥君　島田　俊一君

同上　第二學年

一金壹圓五拾錢　岡藤　源藏君
一金壹圓宛
小松　忠男君　江草　賴多君　小倉　哲君
森下　滋抄君　渡邊　新作君　川島　一男君
仲西　春吉君　寄氣　實明君　芹澤　正中君
守內　義逸君　風井　普一君　橫山　武彥君
藤山　茂彥君　目崎　剛志君　松坂　辰巳君
泉館　豪稔君　中川　清哉君　仁科　義郎君
佐藤　鐵哉君　杉浦　智郎君　石橋　勝巳君
石井　勝藏君　岸　勝利君　皷　甲子郎君
土井　良君　定田　直輔君　谷田　繁虎君
田浦　定君　渡邊　三郎君

一金五拾錢宛
林　謙齋君　河井　正雄君　白川　智正君
瀧澤十三日君　梅澤　仙洲君　內田　永眞君
山元　兵七君　丸山　信次君　佐藤　重憲君

同上　第三學年

一金壹圓宛
井上　幹三君　岩崎　賢造君　林　松立君
西村　實君　岡　諦道君　加藤　正文君
柿添　寛喜君　田中幸右衛門君　高月　良君
竹原　得雄君　梅山　一郎君　增田瀧五郎君
小松雄二郎君　安部　新策君　有元　和平君

遠藤紋五郎君　樋口　定七君　平岡　伴一君
毛利　信雄君　諏訪　剛雄君　鈴木三之助君
花田芳太郎君　鳥越　正三君　大島正七郎君
大庭　清吉君　横尾　孝哲君　田内　盛嘉君
清水彌太郎君　平井　確郎君　相馬　信正君

一金六拾五錢宛

池袋　春樹君　石原　亨君　今井　藏治君
飯山　七郎君　馬場　久雄君　西村　義一君
西　清太郎君　本庄　主一君　小川　兵吉君
大國平二郎君　高林　宗吾君　松岡　良榮君
松崎爲三郎君　深澤　敬明君　江崎　準繩君
秋山　寛君　渥美健太郎君　赤堀　正英君
赤星　瑞君　木村　篤二君　湯谷　基三君
皆木　治平君　神保　次郎君　澁谷　好君
守安　和一君　盛山　知利君

▲同第二部　第一學年　大高　武雄君

一金貳圓宛

一金壹圓宛

太田　秀一君　西田　小平君　柴山槌之平君
鶴岡　豐嘉君　並木　國衛君　三船修一郎君
齋藤　尊郎君　奥宮　僖君　關谷　透君
菅野　省吾君　竹腰久三郎君　小花　務君
中道　俊登君　明戸　一郎君

同上　第三學年

一金壹圓宛

西崎　武君　脇木　禰君

累計拾壹萬四千八百四拾八圓
四拾參錢

◉授業開始　豫て冬期休業の所一月十一日より一般授業を開始せり。

◉科外講義　一月十五日午後一時より講堂に於いて左の科外講義ありたり。

一、世界の燐寸業
米國紐育ダイヤモンド橋寸會社幹部員
早稲田大學法學士　北原　淑夫
マスター、カブ、アーツ

一、歐洲戰爭と米國の產業及貿易
教授　吉田　良三

◉新舊教室の使用替へ　文學科教室の新築落成（十二月號掲載）に就き、從來同科教授に使用し來りたる舊教室を學生の諸學會に貸與使用せしむること、せり。即ち舊教室の内第十五教室を音樂會に、第二十六教室を佛語會に、第二十七教室を商科委員に、第二十八教室を廣告研究會に割當て使用せしむること、なれり。

◉佐藤教授の京都出張　理工科建築學科主任教授佐藤功一氏は、舊臘廿三日京都に出張同。地帝國大學研究室の視察研究を遂げ同廿九日歸京せられたり。

◉圖書館報告

◉閲覽人員及貸出圖書數　本館十二月分閲覽統計左の如し。

開館日數　二十八日

種別	閲覽人員	貸出圖書數
普通貸出	八、〇四九人	一五、三七六
特別貸出	一〇〇	二五〇
館外貸出	一五七	五七〇
公衆貸出	二四四	六二九
合計	八、五五〇	一六、八二五
一日平均	三〇五、三五	六〇〇、八九

◉圖書新加月報　本館十二月分新加圖書は總計二百五十五部三百九十册にして、内洋書五十五部六十八册、和漢書二百部三百二十二册なり。之を細別すれば左の如し。

和漢書之部

部門	購入 部數	購入 册數	寄贈 部數	寄贈 册數	合計 部數	合計 册數
歷史傳記	一	二	一	三	二	六
地理紀行	二	三	二	三	三	八
宗教	一	七	一	一	三	八
哲學倫理經學	三	三	九	一	一二	一三
法律	一	四	四七	六〇	四八	六四
政治	一	二	一〇	一二	一一	一四
經濟財政		一	一〇	一四	一〇	一五
統計報告				六		六
國文學	一	一四	一二	一二	一三	二六
理學				二		二

部門	購入 部册數	寄贈 部數	寄贈 册數	合計 部數	合計 册數
歷史傳記	5	5		5	5
法律	5	6	0	6	6
哲學	6	7		7	7
政治	7	8	0	7	8
經濟財政	4	6		4	6
文學	2	5		2	5
語學	1	1		1	1
地理紀行	1	1		1	1
教育	2	2		2	2
心理倫理	2	2		2	2
理學工學	10	10		10	10
社會學	1	1		1	1
美術工藝	3	3		3	3
宗教	2	2		2	2
字書	1	2		2	2
統計報告	1	1		1	2
商業交通	3	3		3	3
軍事					
圖書館書史學					
合計	55	65	0	55	68

部門	購入 部數	寄贈 部數	寄贈 册數	合計 部數	合計 册數
教育					
小說					
支那文學	四	七	六	一	八
語學	二	二	三	二	一二
外國文學		二	一	一	二
美術工藝	一六	三七	八	一〇	一八
產業			三四	三九	三四
隨筆叢書	二	一〇	一	四	三
體操遊戲	一	一			一
醫學					
兵事					
新聞雜誌					
合計	三四	九九	二六	二三	三〇

◉紀念寄贈金　舊臘逝去されたる講師桂井當之助氏紀念として、今般令兄定之助氏より金二百八十三圓を、又講師中西用德氏より、亡大人紀念として金五十圓を寄贈せられたり。本館は是等遺族の希望に應ぜんがため、適當の圖書を選定し、備付手續中なり。茲にその厚意を謝す。

面影

教授……新歸朝
吉田良三氏

一、亞米利加は概してブローアライである

一、英國上中流社會の愛國心は盛んであるが下層社會殊に勞働階級は冷淡である

一、佛國政府は大藏大臣リボー一人の信用を以て戰時財政を維持して居る

嚮に會計學研究の爲め歐米に渡航せられた教授吉田良三氏が新に歸朝せられたと聞いたので、早速牛込喜久井町三〇同氏邸を訪ひ、拜聽した御話は私は先づ亞米利加に行き、此處に一番長く滯在し、それからエングランド、スコットランド、佛蘭士と巡遊して歸朝したのですが、丁度戰爭が始つてから行つて、歸つても未だ戰爭が終らぬといふ樣な次第で、此の間多少見聞した是等諸國の戰時狀態につき感じた事もありますから、二三御話することに致しませう。即ち米國は紐育、英國は倫敦、佛國は巴里であることは勿論として、

亞米利加人は概して聯合軍側に同情を有つて居る樣である。これは聯合軍側の頭目たる英國と人種を同うし又言語を同うするに依るでもあらうが、主たる原因はアイデヤの上から來て居ること、思ふ。即ち正義人道を貴ぶ米國人、デモクラシーを愛する米國人が、獨逸のミリタリズム、イムペリアリズムと相容れないのは言を待たない事であるからである。のみならず、戰爭開始以來獨逸が正義人道を無視して白耳義の中立を蹂躙して一向顧みる所のない事や、例のルシタニヤ號アラビック號を無警告的に擊沈して百有餘名の米國人を潛航艇の犧牲として、其の弱者として常に最も保護し痛はつて居る婦人小兒の生命を殘酷に奪つたと云ふ樣な事のあつたのは慥に米國人をして獨逸側を去つてブローアライたらしめたに相違ないと思ふ。

これは少し別の話にはなるが……自分が一ケ月間計り滯在のうちに觀察した所に依れば、米國人大體の氣質は一體に自我の念が強い樣である。例へば、婦人小兒に至るまでも、日常起る社會的事件に對し各自相當の意見を立て男子大人を相手として下らざる樣子を見ても、又、男子大人同士で議論する場合に相互自分の主張は容易に曲なげい樣子を見ても、爾く感ぜらるゝのである。併し一旦相手が正しいと認める場合には、直にユー、イズ、ライトと言つて之れに服し、日本人の樣に未練の負惜しみをせぬ事は多とすべきである。であるから、學生の研究の仕方などでも極めて自發的徹底的であつて、自分研究の結果一定の意見を立て、其の意見が教師の說く所と相容れない場合などには堂々と議論を闘はして少しも憚る所ないと云ふ態度である。故に自然教師の方も研究を忽にせず、一場の講義にも深き注意を拂ひ、完全な知識を以て之に臨むと云ふ事にもなる。學界の好氣風であると思はれた。

亞米利加を立つて歐羅巴に渡つて、紐育やシカゴを見た眼で倫敦や巴里を見ると、一般に血氣盛んな働き盛りの人の側から、既に功成り名遂げて氣樂に恩給や利子で食つて居る人の側に行つた樣な氣持ちで、一方は新進氣鋭發々として止まざる新興國で、他方は最早や老大國で、峠を越して居る者の樣に思はるゝが、先づ倫敦に入つて第一番に吾々日本人が奇異の思ひをするのは、今度の戰爭に就いて兵隊の募集を廣告で盛んに行つて居る事である。何の町を通つても、電車の中に這入つても、地下鐵道に這入つても、兵隊募集のビラ貼り紙は實に盛んなものである。又公園や市街の廣場に於ても募兵係りの將校が大勢の人民を集めて募集演說を行つて居るが、忠君愛國を說いて募兵の勸告をするよりも、兵隊に行けば、高い給料が貰へるとか、立派な服が着られとか、甘い物が食へるとか云ふ樣な事を言つて勸誘して居る。いくら國情が違へば、とて一國の運命に關する此の場合にかゝる勸誘の仕方は吾々日本人には餘程變に思はるゝのである。一體今度の戰爭には、其上流中流の人々は愛國心を發揮し、殊に上流の子弟は總て戰場に臨み國の爲に戰つて居るさうで、ケンブリツヂ、オツクスフオード大學などに行つて見ても、何のカレーヂにも自國の學生は殆んど居らないと云ふ有樣で悉く戰爭に行つて居る。併し下層社會に至ると我が日本などに比べて見ると、誠に愛國心に乏しい樣に思はるゝ。彼等の多數は此の戰爭が英國に取つて非常に重大であるといふ意味を一向に了解して居ないかの樣に思はるゝ。殊に勞働者階級の多數は此の機會を利用して自分等の私利私慾ばかり計らうとして居るかの樣に思はるゝ。國の大事に當りて無暗にストライキなどを企てゝ居る。

これは一般に下層社會の教育が低いことや、勞働者が資本主に對して、長い間有して居る敵對心や、政治家が政略上彼等下層社會の歡心を迎へて居つたといふ樣な事が、大に原因して居るのであらうと思はるゝが、全體英國は從來外交でばかり成功した國であつて他人に戰爭さして自分は常に外交で大きな獲物を獲て居る國であるから、自然國民をして國防の精神を沒却せしめ、戰爭は他國の兵が來て戰つて呉れるものゝ樣に思はしむるに至り、此の感念が、戰爭を容易視せしむる原因となつて、此の國運を賭すべき重大なる戰爭にも斯くは冷淡なのではあるまいかと思はるゝ。夫れに英國は島國で大陸から離れて居るから、自然戰爭の出來事を感知することの痛切ならざること是れ亦一般戰爭の事に熱中しない原因にもなるであらう。

かゝる事情である故か彼等一般英國人日常の話題には吾々が想像して居つた程戰爭の事は話されて居らない。彼等に取つては左程興味を有つて居らぬ者と見える。又之を他の方面に徵して見るも、近來日本でも頗る人氣ある娛樂となつて居る樣に米國でも、英國でも矢張り同じ樣に屋內娛樂の最も人氣ある者は活動寫眞であるが紐育に居つて之を觀に行つた時には盛に歐洲戰爭に關した映寫があつたが、英國に行つて見ると意外にも戰爭のヒルムは絕無であつて、何れの活動寫眞小屋もチヤリーチヤプリンと云ふ道化役者の滑稽劇で、全見物を引付けて居る有樣であつた。之に反して戰時の獨逸を觀て來た或る米國人の話に依れば、獨逸にあつては、上下擧つて、戰爭が彼等日常の話題となつて居ることは勿論、活動寫眞に行つても全然英國と反對の現象を呈して居つて、何處の活動寫眞でも開戰以來入場料を引下げ、兵士小供は無料で觀覽せしめ、活動寫眞のヒルムで戰爭に關する種々の報道を與へて其の愛國心を鼓舞刺激することに努めて居るといふ事であつた。此の外戰地に出發する軍隊に對する模樣でも、日露戰爭當時の我國の樣に、鐵道の各ステーションで出征軍人の血を湧き立たしむる樣な刺激的な見送りもなければ、萬歲を唱ふるでもなく、又花束を投げる事もなく、如何にも冷々淡々な樣である。併し此の事を或る英國人に質した時に、彼は斯く答へた。英國民の愛國心は活動のフヒルムで奬勵されたり、出征軍人に浴びせかける萬歲の聲や之れに投ずる花束に刺激さるゝ樣な幼稚なるものではない。そんな幼稚な時代は既に過ぎ去つて居ると。兎に角吾々外國人の眼には英國人一般戰爭に對する感情は大體に於いて冷淡の樣にしか映らない。

處で、ボーア戰爭當時の英國を觀察した或る米國人の話に依ると、當時の英國民は一體に今日よりも遙に戰爭に熱心であつた。蓋し其の時には英國が世界各國に對し、非常に不人氣であつて、世界の大部分が英國に同情を有たなかつた

事が強く國民の感情を刺激して、彼等を戰爭に熱中せしめたが、今度の戰爭は殆んど世界の大部分が英國に味方して之れに同情を寄せて居るから、謂はゞ其の奮發心を鈍らすといふ樣な譯で、此の戰爭が英國に取つて非常に重大な危險性を有つて居るといふ事に氣付かず、戰爭を容易視するのであらうと言つて居る。それはさうかも知れない。何は兎もあれ、此の度の戰爭に依つて最も大に失ひつゝあるは英國である。何となれば、自國の高價なる軍費を仕拂ふ外にベルジユーム、セルビヤ兩國の軍費全部、露西亞、伊太利の軍費の大部分、又或る程度まで佛國の要する軍費すらも供給すべき地位に立つて居るからである。就中露國に對して今日まで立替へた軍費は莫大なものゝ樣である。昨年紐育で英佛聯合で起した十億圓の外債の如きも實は露國の米國に注文した軍需品の代價仕拂の爲めであると言はれて居る。又英國が無謀なるダーダネルスの攻擊も露國に提供した莫大なる軍費の代償として、露國が黑海沿岸に集積した穀物を得んことが一大原因であつたとも言はれて居る程である。此の如く聯合國に對する軍費補助の責任ある外、英國は、例のボランタリーシステムであるが爲め、兵士を戰場に立たすには、徵兵制度を有する他の歐洲諸國の兵士に比し、非常にエキスペンシーヴであつて、獨逸兵などに比べると、英國兵一人の費用は其の二倍乃至二倍以上に當ると言はれて居るのであるから、英國は一方には軍器軍需品の消費高が次第に增加するのと、他方には他の聯合國に軍費立替金の增加するのとで、自地供給の軍事費は日增しに巨額となり、昨年のクリスマス常時夙く既に、一日に要する軍事費、實に四千萬圓以上に達したといふ事である。此の狀態で、假りに此の秋まで繼續するとしても、英國政府は、既に今日までに起した百億圓の借金の外に、更に尙ほ百億圓の借金を要すると言はれて居るのである。英國の損失また實に驚くべきではないか。

佛國に行つて見ると、戰場に近いだけ、英國よりも愛國心は盛んな樣で、國民上下擧つて大なる決心で戰ひつゝある風が見える。併し何分老境に入つた國、殊に三十年此の方更に人口の增加を見ない樣な峠を越した國であるから、愛國心は盛んであつても、人口增加の强い、又若々しい元氣の溢るゝ國には及ばぬ樣に思はるゝ。此度の戰爭に當り、國內に於て最も人望あるは佛蘭西軍總司令官ジヨフフォー將軍と大藏大臣アレキサンダー・リボーの二人である。ジヨフフォー將軍の寫眞や、繪葉書や、又金屬大小の肖像は恰も日露戰爭當時の我が東鄕大將乃木將軍の樣に、到る所の店頭に飾られまた販賣されて居る又リボー大藏大臣が國民に信用されて居る事亦非常である。例へば戰爭の始まつた當時國民競つた所持の金銀貨を隱蔽するの風があつたさうであるが、リボー一度び大藏大臣となつたと聞いた國民は始めて心を安んじ、一旦隱蔽した金銀貨を取出し、盛んに軍事公債等の募集に應ずるに至つたといふ事である。謂はゞ國民リボーを信じて始めて佛國政府を信ずるといふ次第であつて、佛國政府は大藏大臣リボーの信用を以つて世界未曾有の大戰爭に處する其の財政を維持し得る者といふべきである。

校友會報

◉校友會幹事會　一月二十六日午後五時より麴町區內幸町早稲田倶樂部に於て校友會幹事會を開き、左の事項に付協議を遂げ、午後八時半散會せり。

一、春期校友大會開催の件
一、校友會規則改正の件
一、大正四年度決算の件
一、推選校友銓衡の件

尙當日出席したる幹事左の如し。

山澤　俊夫　小林豐太郎　瀨川　光行
宮崎八百吉　別宮音五郎　田中小太郎
前田　多藏　石井　政吉　河野安通志
森　盛一郎　淺川　保平　川口　潔
橫井　春野　黑田善太郎　村田　正雄

◉早稲田倶樂部消息

▲新年宴會　一月八日午後四時より麴町區內幸町同倶樂部に於て開く。此日天氣晴朗來會者定刻前より引きも切らず忽ちにして階上階下全く空席を見ざるに至れり。如斯盛況なれば素より一堂に會合する事を得ず、各室に分れて漸く着席す、幹事尠らず面喰の體なり。席定まるや山澤常任幹事開會の辭に兼て東儀氏新に本部經營の任に當られたるを紹介して東儀氏と代る。東儀氏就任の挨拶に次で、會長面會日并に定設各集會日（廣告欄參照）を發表せり。

右挨拶終つて後開宴。來會者いづれも學生時代の昔にかへりて意氣軒昂互に胸襟を披て談論す。會員島野金吾氏麥酒數打を寄附され宴益々佳境に入り獻酬愈盛なり。豫期以上の盛況裡に散會したるは午後十時なりき。當日の出席は左の諸氏なり。

井口　誠一　井芹　纖志　伊藤　正
石井　政吉　池田　大伍　長谷川誠也
二木　保幾　星野　治作　堀內　英
東儀　安治　德永　重康　小野友次郎
大橋　誠一　大槻　音松　渡邊雅之助
渡邊　亨　柿內　照康　吉川　仙藏
吉田　淳　田川大吉郎　田中　穗積
田中四郎左衞門田中小太郎　橘　靜二
坪內　士行　坪谷善四郎　長岡　幣三
中川　重政　中野　鐵平　中島半次郎
並木覺太郎　紫安新九郎　野間　五造
反米伊豫太郎　桑原　淳貫　黑川　九馬
山田英太郎　山澤　俊夫　山本　愿太
松垣　新一　松島　肇　藤澤　久
小山　谷藏　小山精一郎　小林豐太郎
五明忠一郎　昆田文二郎　金　慶吉
佐藤甚九郎　佐藤　忠吾　齋藤　隆夫
齋藤忠太郎　酒井　谷平　相良大八郎
櫻井兵五郎　木村賢三郎　鹽澤　昌貞
島野　金吾　島谷　亮輔　樋口勘治郎
平沼　淑郎　平野　高　森　源作
森　盛一郎　瀨川　光行　瀨下　清通
菅原　又次　杉田金之助　杉田　駿
鈴木　音次

▲會長面會日と午餐會　本部會長高田博士の面會日（毎週水曜自正午至午後一時）には豫て有志午餐會を開く事に定め、其第一回を一月十二日（第二水曜）に開けり。高田會長橘靜二氏と共に正午來會。會長に前後して東儀季治。大谷順作。大橋誠一。渡邊亨。田中小太郎。田中四郎左衞門。高橋都素武。永井柳太郎。紫安新九郎。上原鹿造。浦邊襄夫。黑川九馬。山澤俊夫。增田義一。昆田文二郎。瀨川光行の諸氏出席。應接室に於て少時談話の後、食堂に於て盛なる午餐會を開き、次いで同十九日第二回の面會日及び午餐會には高田會長は議會開院中にて頗る多忙なるに拘らず特に出席せらる。此日の出席者は會長の外池田龍一

東儀李治、田中唯一郎、田中四郎左衛門、橘靜二、黑川九馬、山澤俊夫、前島彌、小山松壽、小山清一郎、昆田文二郎、五明忠一郎、降旗元太郎、本野英吉郎、森盛一郎、諸氏にして、石塚三郎（長岡市）原田駒之助（大阪市）岡安理平（福岡市）黑澤昇治（廣島市）諸氏等遠來の人士亦參加せられ、非常の盛會なりき。

●商科第一回卒業生會　一月十五日午後六時帝國ホテルにて開催。來會者は左の十二名にして各自胸襟を披き歡を盡して散會せり。

丸田喜一郎　蜂須賀武彦　水崎保
今橋稔一　日野正信　河野安通志
好地昇之助　高津季政　阿部又三郎
原田忠雄　小熊倉次郎　生方眞一

●二交會　一月廿九日午後六時神田小川町ときわにて第二回懇親會開催。第一回よりの經過を簡單に幹事報告し、直に次會幹事左の通り選定。

尾崎義三郎　藤澤久　白石敬親
村井清太郎　岸孝一郎

終りて宴に移り、酒杯重なるに從ひ、各自胸襟を披き商況を談し、戰亂の影響を語り、果ては醉餘の十八番に及び、諧謔數種、時の更けるを知らず、溫き情味を十二分に掬し、十一時散會。出席者下の如し。（柳壽報）

●林克已（横濱稅官）●金澤柳壽（大日本麥酒會社）●土屋卓三（日本石油會社）●浦田政名（神國生命保險會社）●楢村小善太（川崎銀行）●齋藤恒助（丸見屋商店）●村井清太郎（日本郵船外航課）●白石敬親（三菱合資會社）●吉本里克（山内侯爵家令）●岩井桝太郎（自營商業）●小林龍次郎（三越吳服店）●山本盛吉（大日本製氷會社）●尾崎義三郎（自營商業）●吉田弘（三越吳服店）●稲垣浩（東京回漕合名會社）●柴田潤藏（平尾商店）●島崎眞一（内國通運會社）●岸孝一郎（平野藥種原料店）●長谷川信次郎（東京電氣會社）●六角宇太郎（芝浦製作所）●藤澤久（ファー・イースト記者）

●城南校友會　昨年九月校友學生の多數を包擁し、幾多先輩知名の贊助を得て成立したる本會は一月十五日黄昏より第二例會を府下大森町歌茶屋に於て開催せり。先づ

一、開會之辭　豊田兼助
一、本會に對する吾人の希望　中村一英
一、思ひ出つるまゝ　遠藤太
一、校友を代表して　鐵道院技師荒木順二
一、歐洲戰後と吾が青年　代議士高木正年
一、所感　司法省副參政官關和知
一、閉會之辭　村田松郎

ありて後ち開宴。琵琶茶番等の餘興の間に献酬談論を恣にし、和氣靄々裡に散會したるは十一時なりき。

●土浦校友會　舊臘三十日午後七時より茨城縣土浦町霞月に於いて忘年會開催。母校評議員櫻井平兵衛氏の挨拶ありて開宴。席上寄せ書等に感興を惹き十一時閉會せるが、出席諸氏左の如し。（會幹報）

櫻井平兵衛　富岡良夫　鈴木鴻平
折本邦彦　皆川重義　染谷忠軸
安藤定

●足尾稲門校友會　已むに止まれぬ機運に逢遭し樋口慶次郎、金子本作兩氏の肝煎にて一月十八日午後五時半校友會第一次發會式を當町大和家本店に開く。先づ會則其他御大典紀念事業資金應募の打合を爲し、次で開宴。歡談献酬數刻の後ち散會せり。當日の出席諸氏左の如し。

佐藤吉六郎　樋口慶次郎　西岡清
村上雋夫　金子本作　富岡義則
大久保清志　中泉新　木下靜馬
重井平四郎　宗方哲太郎　大澤定正
山崎忠純　鶴島茂　池田菊太郎
關榮雄　大川吉三　松本章
米田一　朝倉實

尚ほ役員として左の五氏を擧げたり。

會長　佐藤吉六郎
次回幹事　西岡清　大久保清志　中泉新
關榮雄

●靜岡校友會　靜岡市及其の附近在住の校友諸氏は、一月十六日報知新聞社の依頼に依り講演の爲め同地に出張せられたる高田文部大臣の歡迎を兼ね正午より靜岡倶樂部に於いて臨時校友會を開催したるが、來會者多數盛會なりしといふ。尚ほ同會幹事左記の如く決定し、事務所は同市本通一丁目八番地靜岡榮一社に設置せられしと。

室伏完　小川爲親　小澤孝三
榛葉嘉作　佐々木誠吉　木村豊次郎
山崎保平　中山均　川合廉作

◎岡崎校友會發起

岡崎校友會組織の事は、數年來の懸案であつた。二三有志の間には夙に其の必要を唱へられてゐたが、今回愈々成立を見るに至つたのは、吾人の衷心より喜びとするところである冬季休業で歸省中の商科の山田正、天野康夫の學生兩君と、校友松下範治、市川堅吾、千葉繁造諸氏が發起となつて斡旋し、茲に兎も角も發會式を擧ぐることゝなつた。吾人は本會が年と共に健全なる發達を遂げて大學の爲め、社會の爲め寄與貢献するところあらんことを切に祈る次第である。

大正五年一月四日校友學生一堂に會し、松下君、發起人を代表し本會設立の趣旨を述べ、市川君左記會則を提案して協議を遂げ、次いで役員の選擧を行ひ、大典紀念事業資金寄贈の件、繁野政瑠氏を校友に推選の件等を可決して宴會に移る。酒間胸襟を開いて歡談縱横遺憾なくワゼダニズムを發揮して散會した。尚ほ席上選擧の結果、幹事は、市川堅吾、手島諒一郎、天野康夫の二氏を煩はすことゝなる。當日の來會諸氏左の如し。（幹事市川報）

松下範治　市川堅吾　千葉繁造
葛山頴一　足立清逸　手島諒一郎
天野康夫　山田正　加藤三二
山田豊　元松昇藏

會則

第一條　本會は早稲田大學岡崎校友會と稱す
第二條　本會は早稲田大學と氣脈を通じ早稲田大學の事業を裨補し兼ねて會員相互の親睦を計るを以て目的とす
第三條　本會は岡崎在住の早稲田大學校友、早稲田大學々生及び早稲田大學に關係あるものを以て之を組織す
第四條　本會は年二回大會を開き本會の目的を達するため必要なる事項を行ふ
但し必要により臨時會を開くことあるべし
第五條　本會は幹事三名を選任し會務を處理せしむ

但し一名は學生中より選出するものとす

第六條　幹事の任期を一ヶ年とし會員の互選により之を定むるものとす

第七條　本會の經費は會員の合議により必要に應じ其都度徴收して幹事之を處理するものとす

◉香川縣校友會　大隈總長來遊紀念の爲め一昨年秋季に於て其の紀念校友會を開催せし本會は、其の第二回紀念會を去る十一月二十七日午後五時より高松市内町新常盤に於て開催せり。當日來會せるもの約二十名。一同の着席を待ちて幹事開會の挨拶を述べ、饗て開宴。酒間歡談清話湧くが如く、一同十二分の歡を盡して散會せしは十時過なりき。

◉和歌山校友會　一月二日午後四時先づ和歌中學校野球部の招請に依り來和せられたる母校運動部長安部教授、野球部監督河野講師及野球部選手一行を丸の内風月庵に迎へ晩餐を饗す。會食中評議員南方常楠氏の歡迎辭に次いで安部教授學生改革案に對する所感より母校御大典紀念事業に就ての希望に及べる演說を以て謝辭に代へられ、一同校歌合唱の上六時三十分發大阪豐中に向はる、一行を和歌山驛に送り、再び風月庵に引返へして、今回新に本縣警察部長として來任せられたる校友和田純氏を迎へ兼ねて新年宴會を開く。席上發起人を代表して齋藤潤三君歡迎辭を兼ねて開會の挨拶あり。之に對して和田氏の謝辭ありて開宴。主客十二分の歡を盡して母校の萬歳を唱へ十一時散會せり。出席諸氏左の如し。

和田　純　南方　常楠　野村　浩一
木本主一郎　安江稻次郎　池田信太郎
西林　忠治　齋藤　潤三　西本　竹吉
寺本喜一郎　大村　隆行　小笠原正雄
龜淵盛太郎　村山　義輝　掛下龜次郎
南方常太郎　井關喜一郎

◉松江市校友會　一月廿三日同市殿町岡坂悅笑軒に於いて開會。來會者十三名盛會なりしといふ。

◉小樽校友會　一月三十日午後七時より小樽倶樂部に於て春季大會を開催せり。幹事小田桐由次郎氏起つて開會を宣し、會務報告、會計報告をなし、次いで小田桐由次郎、横溝薫一、鈴木兵亮、西島元甫の四幹事任期滿了せしを以て新幹事を指名推薦する事となり、松崎金藏、藤山健次、河野智精、池島賢造の四氏新幹事に就任せり。かくて一同食卓を圍み宴に入るや、席上新幹事の挨拶、會員の所感演說、新顔會員の名乘り合ひ等あり。盞のめぐるにつれて歡談歡語盡くる所を知らず、和氣靄々裡に十時散會せり。當日の出席者は左の十六氏なりき。

板谷　眞吉　原　重　文　小田桐由次郎
大磯　豐次　川島榮三郎　加納鷄次郎
高崎　太平　中田　祿郎　中島　三郎
山田直三郎　藤山　健次　淺山　正三
芦澤　司朗　佐藤　昇平　坂井　昇三
池島　賢造

◉宮城縣古川町校友會　同地在住の校友諸氏は校務を帶び同地方に出張中の學長秘書佐藤正氏を一月六日同地自由亭に招請して一夕の歡會を催されたるが、來會者十名、主客打解けて趣味深き小宴なりしといふ。

◉長岡校友會　壹月廿一日午後五時半より市内魚作樓に於て中越校友會を兼ね新年宴會を開く。會する者廣井一、土田元郎、佐藤德三郎、覺張半四郎、山口得三郎、立川秀司、川上一郎、八子正敬の諸氏にして、席定まるや幹事開會の挨拶に次いで、本年内幹事を前幹事の指名にて、山口得三郎、立川秀司の兩氏に依賴して宴に入る。當地雪の名所にて例年尺餘を踏んで會するが例なるに、本年は地上更に積雪を見ず。稀に見るの新年にて、恰も母校在學當時東都神樂坂にて新年宴會を催すの感あり。各自其當時に若返りて意氣衝天。校歌やら野球應援歌の合唱にて滿堂割る、許なり宴闌なるにつれて市内藝妓の手踊あり。各自得意の隱藝等あり、十二分の興を盡し九時半散會せり。

◉福岡市校友會　同市及び附近在住の校友諸氏は一月九日午後六時より博多東中洲博榮館に於いて新年宴會を開き、先づ幹事の改選を行ひ全部再選に決し、次に母校大典紀念事業資金寄附の件に就き協議したる所、幹事に一任することに決し、やがて開宴。來會者多數にて盛會なりしといふ。

◉臺北校友會　臺灣臺北在住の校友諸氏は舊臘十八日午後六時より新公園のライオンに於て秋期大會を開きしが、集る者約四十名。開宴に先ち月々會費徴集の件並に倶樂部新設の件を協議せし所、前件は即決後件は六名の實行委員に附託し、やがて開宴。獻酬の間に新舊校友の懷舊談に時を移し、果ては「都の西北」を合唱し又母校の萬歳三唱十時散會せり。

◉新潟縣校友會の紀念樹寄贈　昨夏新潟縣新發田町に於て開會の同縣校友會大會の決議に基き、高さ五間餘の銀杏の紀念樹一株寄贈に就き早速校庭に植付け、其の厚意を永久に紀念する事とせり。

◉校友動靜

◉村原　保（四二政）　神戸市榮町三丁目神榮株式會社勤務

◉高橋一二（4政）　關東州南滿洲鐵道勤務

◉中村造酒彌（二三政）　三井銀行本店に轉任

◉川崎新吉（三七政）　新潟每日新聞社東京支局長（京橋區元數寄屋町二ノ一一）

◉大戸愿勝（四五大政）　南信新聞主筆（牛込區喜久井町二五）

◉市島禎吉（4政）　新潟銀行勤務

◉原　重文（三八大政）　北海道小樽區北濱町三井物産會社勤務

◉大西新治（四四大政）　讀賣新聞社を辭し兵庫縣揖保郡香島村に歸鄉

◉大谷貫吉（4政）　近衛步兵第二聯隊第八中隊一年志願兵として入營

◉小島兒四郎（2政）　南洋貿易株式會社マリアナ群島トラック島支店勤務

◉青山樹左郎（4政）　本鄉區役所勤務

◉宮田竹千代（4大政）　名古屋步兵第六聯隊第二中隊入營

◉柴垣宗三（三四英政）　神戸市平野矢部町一九五に於て化粧品製造業從事

◉加藤多喜治（四〇法）　岡山評論社長（岡山縣片上町一二四〇）

◉黑木要太郎（三九大法）　九州電燈鐵道株式會社唐津營業所に轉勤

◉三ッ澤鶯（四二法）　秋田縣廳勤務（陸軍三等主計築港書記）（同縣南秋田郡船川港町船川築港事務所七號官舍）

◉石井政吉（二八文）　古川合名會社より古河家に轉勤

◉中野龍彦（二九法）　靜岡民友社員（同縣志太郡大宮村禰宜島）

◉山中仁太郎（4大法）　日清生命保險株式會社に

入る

●小泉改平（三九大法）　足利共運株式會社長、新田肥料倉庫運送株式會社取締役

●和田純（三五行）　和歌山縣警察部長に轉任（和歌山市二番町官舎）

●桑原重矩（四〇大文）　東洋文明社主幹兼主筆（府下巣鴨町一一一一）

●岡崎主計（4大文）　神戸又新日報記者（神戸市荒田町四丁目七〇ノ二）

●鵜川富男（四二大文）　大阪府修德館教務主任（大阪市東區德井町一ノ三二番屋敷）

●芳原慶壽（三九大文）　朝鮮京城南山町大谷派本願寺京城別院在勤

●竹内精一（四〇大商）　日本賣藥株式會社新嘉坡支店長に轉任

●東　履吉（4大商）　千葉第九十八銀行に轉勤（千葉縣千葉町富士見町五八小川方）

●竹内四郎（3大商）　滿洲鐵嶺西町榊組洋行に入る（同行内）

●池上米治（2大商）　内國通運會社員を辭し海外渡航

●岡本　千（4大商）　日本郵船會社神戸支店勤務（神戸市中山手通り七丁目番外五八白木方）

●土田豐太郎（4大商）　福知山歩兵第二十聯隊第七中隊に一年志願兵として入營

●小林重平（3大商）　支那上海江西路第十八號增田洋行勤務

●榛葉嘉作（四一大商）　靜岡市靜岡實業銀行員

●地引　武（四三大商）　神戸市榮町五丁目十五番屋敷加島銀行神戸支店に轉勤（同市下山手通六丁目八九ノ一高木方）

●金子正男（四五大商）　神戸市前町十八番永井商會勤務

●松尾千太夫（3大商）　奈良市南袋町三三江商合資會社莫大小工場勤務

●野崎丘四郎（四五大商）　福島縣耶麻郡盤梯村高田商會大寺製錬所勤務

●小林德重（四五大商）　門司市株式會社三井銀行門司支店に轉勤

●武井正房（2大商）　日本橋區北鞘町六帝國海上運送火災保險株式會社勤務

●西尾敬介（四三大商）　日本共同石材株式會社四方津出張所勤務（山梨縣北都留郡巖村四方津驛前加藤方）

●大橋敏郎（四三大商）　麹町區内幸町一ノ五公私經濟雜誌主幹

●大久保辰太郎（3大商）　支那天津日租界常盤街に於て常盤洋行經營

●川邊英之助（四五大商）　大阪市東區高麗橋四丁目島商店勤務

●横井彦一郎（四五大商）　名古屋銀行本店詰（名古屋市中區四瓦町五ノ切七〇番地）

●高地安次郎（4大商）　麹町區内山下町勸業債券月報社勤務（小石川區高田老松町一六）

●中村彌次郎（3大商）　支那上海四川路三井物産上海支店勤務

●瓜生龍丸（3大商）　神戸市紐育スタンダート石油會社大津出張所勤務

●栗原靜造（3大商）　尾道市廣島縣立尾道商業學校在勤

●山口堅吉（四〇大商）　神奈川縣足柄下郡溫泉村底倉三五九、富士屋ホテル株式會社取締役、富士屋自働車株式會社常務取締役

●綾部幸夫（2大商）　東京府農工銀行員（府下大久保百人町八二）

●三井周二（四一大商）　芝區新幸町株式會社日本製鋼所勤務（淺草區今戸町二八）

●三宅主一（四五大商）　神戸西部鐵道管理局經理課に轉勤（兵庫縣武庫郡西宮町西濱）

●宮島長治（2大商）　函館區東濱町第三銀行支店勤務

●重城康三（4大商）　一年志願兵として近衛歩兵三ノ二に入營

●鈴木　謙（3大商）　三菱合資會社に入る（市外巣鴨村宮仲一九八四）

●今泉正惠（4理工）　朝鮮京城電氣會社廠浦發電所詰（京城新龍山漢江通一高濱商店内）

●本間駒吉（4理工）　電爐工業電陽舍工場工務課長技師（福島縣伊達郡長岡淺井旅館内）

●望月信太（4理工）　志願兵として千葉鐵道聯隊第八中隊入營

●片岡與七郎（3理工）　群馬縣横川驛鐵道院横川發電所に入る

●大橋周治（4理工）　大阪市曾根崎字治川電氣會社に入る（大阪市北區西野田江成町二八一形田方）

●橋田　肇（3理工）　東京計器製作所に入る

●勝又敬之丞（3理工）　北海道千歲郡王子製紙株式會社千歲發電所に轉勤

●中島喜悅（4理工）　伊那電車軌道株式會社勤務（長野縣上伊那郡辰野大庭小路）

●足羽忠道（3理工）　高崎通信區に轉勤（高崎市八島町鐵道院官舎五號ノ一）

●青谷米太郎（4國）　佐賀縣立唐津中學校教諭（同縣唐津裏坊主町二九二）

●西村豐吉（四一國）　宇都宮師範學校に轉任（宇都宮市戸祭町一〇三〇）

●井上正直（4英）　宮城縣白石中學校在勤

●大曲美太郎（三八歷）　朝鮮鎭海稅關支署長事務取扱（同支署官舎）

●深野豐太郎（三九法制）　山口縣興風中學校を辭し同縣吉敷郡平川村に歸鄕

●榊原　直（四四歷）　福岡縣立小倉中學校在勤

●澁田茂太（四〇英）　朝鮮京城本町四丁目蓬萊生命保險相互會社京城出張所勤務

●石野　彰（2數）　三田英語學校在勤（芝區松本町二五吉澤方）

●細越溫三（2數）　廣島商業學校在勤

●藤井　精（二二普）　千葉縣成田町成田銀行支配人となる

●小出範治郎（4推）　兩國運輸事務所長に轉勤（本所區石原町一鐵道院官舎第一號）

◉轉居

●民野雄平（教授）　市外落合村字丸山三四三

●島村他三郎（講師）　府下高田村大字高田字大原一五五一番地

●栖原豐太郎（講師）　本鄕區曙町七にの一號

●林田龜太郎（舊講師）　荏原郡大森町森ヶ崎

●後藤信治（三九大政）　麹町區永田町一ノ三一

●安田與四郎（三四英政）　大阪北區眞砂町一〇

●筑紫富雄（三九大政）　府下下澁谷羽根澤二百二十八番地

拜啓各位益御清榮奉慶賀候陳者舊臘**校友會名簿新調**御手許へ差出候に付ては住所職業等に相違の廉も有之候はゝ早速訂正可仕候間何卒御一報願上度候

尙右校友名簿及學報等壹萬有餘の校友各位へ無漏配布致候に付ては**年々多額の經費**を要し候間**大正五年維持費**（年額金貳圓以上）の儀近日地方は集金郵便京濱は東京集金社に託し夫々集金可致候間何卒其節御拂込願上候敬具

大正五年二月

早稲田大學校友會幹事

●山口誠象（三八政）　長野縣松本市外濠田
●水野　惠（二八英政）　麻布區市兵衛町二ノ五十八番地
●高谷文内（四〇政）　市外高田村大字雜司ヶ谷龜谷七
●渡邊不二彦（四四政）　牛込區矢來町四一
●北澤速水（四五政）　小石川區小日向臺町三ノ二三尙志社内
●佐々木清右衛門（三六政）　臺灣臺北城内府中街四ノ二八
●三好榮次郎（三九政）　府下入新井村新井宿二二五一
●山崎定太郎（三八政）　四谷區傳馬町一ノ七
●望月謹彌（四三政）　靜岡縣庵原郡江尻町
●林　承輔（三七法）　下谷區仲徒士町一ノ二七鈴木祐忠方
●杉山治雄（四一大文）　芝區白金三光町二三二
●兼阪　常（三六哲）　滿洲瓦房店公學堂
●渡利彌生（4大文）　島根縣邑智郡矢上村
●佐藤　正（四二大文）　牛込區藥王寺町五三
●納　武津（三四文）　牛込區早稲田町五
●伊藤　尙（四三大文）　小倉市京町十一丁目
●西川善太郎（3大文）　日本橋區蠣殼町一丁目四番地（二葉英學塾塾長）
●村上廣告（4大文）　小石川區大塚坂下町八八
●大宮英之助（三二文）　府下北豐島郡高田村高田一四四四
●國分正憲（四〇大文）　鹿兒島縣出水郡高尾野村
●矢田部三四（四四大商）　山口縣大島郡字小松
●山田兵吾（2大商）　北海道北見國網走町南裏通一八
●古殿　基（三八法）　北豐島郡高田村雜司ヶ谷旭出四三
●岩淵澄夫（4大商）　長崎市西濱町二佐伯方
●鈴木幸夫（2大商）　愛媛縣新居郡角野村東平住友第一合宿所内
●今井　孝（四四大商）　北海道小樽區山ノ上町三十二番地
●妹尾精一（2大商）　市外下大崎一二二
●柴田　貞（四五大商）　大阪市南區長堀筋二の三七番地
●寺島三之輔（四二大商）　市外大崎町字上大崎四四四
●深井　延（四四大商）　大阪市外北天下茶屋生田四五八山木方
●山名義高（四五大商）　市外高田村雜司ヶ谷大字金山三三三
●倉橋　潔（3大商）　府下西大久保四〇七
●辻　一郎（四三大商）　麻布區東町三二
●竹之内誠治（4大商）　牛込區馬場下町新納方
●谷崎善三郎（四〇天商）　本郷區駒込千駄木町五十五番地
●尾關光藏（3大商）　本郷區元町一ノ六四番地竹内清方
●立岩三郎（四二大商）　牛込區若松町一三三番地島野方
●伴良太郎（四一大商）　京都市東洞院四條下ル（株式仲買人）
●小川波平（4大商）　本郷區彌生町三永田方
●山田峯藏（3大商）　京都府加佐郡新舞鶴町大門通四條東入ル
●遠藤寛三（4大商）　牛込區早稲田町四十一番地
●青山吉堯（4大商）　府下荏原郡入新井村新井宿二二五一三好方
●長谷川信次郎（2大商）　牛込區山吹町三〇六
●山縣一二（2大商）　大阪市南區上本町二丁目三十一番地
●長谷川恭康（3理工）　名古屋市中區東瓦町七十番地
●牛島寅生（4理工）　府下中渋谷三九八番地
●竹内順三郎（3理工）　名古屋市中區流川町三十五番地
●中村　鎭（3理工）　麹町區飯田町三ノ二十六番地於島方
●島田仁三次（2數）　神田區表神保町一〇番地内山方
●廣政幸助（三八英）　宮崎縣宮崎町字大工町
●松崎爲三郎（四一歷）　本郷區森川町一丁目四百五十四番地
●大内　淳（3國）　北海道旭川區一條通五丁目右六號桑原茶店内
●井上質夫（四〇國）　牛込區下宮比町一二
●青木　浩（2英）　府下戸塚町下戸塚五二八
●松井直次（4國）　高田市樹形町
●佐藤堅司（3英）　府下高田村雜司ヶ谷五八五
●佐藤良三（四一、歷）　和歌山縣新宮町口山際地正政町
●河野昌太郎（四二推）　大阪市南區難波新川町二丁目一方亭方
●加藤隆作（四二推）　青山原宿八五

◉改姓名

●瀧本貞一（四二大文）　舊姓土橋（石川縣立小松中學在勤）
●日下部大造（3大商）　舊姓天野（長崎縣南高來郡島原村新馬場）
●小笠原幸彦（3政）　舊姓三好
●新田弘之（3大商）　舊姓松岡（北海道釧路港西幣舞八〇新田汽船合資會社出張所）
●星谷佳雄（2大商）　舊姓渡邊（赤坂區檜町十六番地）
●太田憲秀（二四政）　舊名雪松（大阪市北區伊勢町）

明治四十二年　高等師範部歷史地理科出身
明治二十四年　邦語政治科出身　伊原純司
大正三年　大學部商科出身宇都宮清宇
明治三十二年　英語政治科出身岩瀨誘
明治四十年　大學部商科出身廣切一郎
明治四十年　大學部政治科出身板部絲
明治二十三年　英語普通科出身牧田
明治四十四年　大學部商科出身原田卷
明治三十八年　專門部政治經濟科出身神林周次郎
明治四十三年　專門部政治經濟科出身淺沼傳次郎
右諸氏の訃報に接し哀悼の至りに堪へず茲に謹んで弔意を表す

◉正誤＝大正四年十一月調製校友會會員名簿五頁上段八行目前橋孝義氏宿所下澁谷とあるは下落合の誤植につき茲に正誤す。

學會

◉文科講師會　文學科教授講師諸氏は本學年開始以來新に同科に招聘せられたる教授講師の面識會を兼ね、一月十九日午後五時より内幸町早稲田倶樂部に於いて新年宴會を開催せられたるが、席上同科の教授學務等に關する議論頗る盛んに起り、殊に研究科設置に關する諸説の如きは頗る傾聽に値する者ありたり。

出席諸氏左の如し。（イロハ順）

五十嵐　力　市村瓚次郎　原口竹次郎
長谷川誠也　金子　馬治　小田内通敏
勝俣詮吉郎　吉田　東伍　吉田紘次郎
吉江　喬松　高桑　駒吉　高杉　瀧藏
相馬　昌治　武田豐四郎　坪内　士行
中島半次郎　中島　泰藏　中桐確太郎
内ヶ崎作三郎　山岸　光宣　桑木　嚴翼
楠山　正雄　増田藤之助　矢津　昌永

煙山專太郎　藤山治一　エチ、エー、コックス
會津八一　安藤忠義　北畠吉
岸本能武太　紀淑雄　椎尾辨匡
宮井安吉　關與三郎

◎中等教育研究會

會計報告

（自大正四年一月至同年十二月）

收入

一前年度繰越金	參六、參八五円
一會費	參、五〇〇
一會長歡迎會々費	貳壹、〇〇〇
一國漢、英語部會々費	壹、九〇〇
一常集會々費	五、七〇〇
合計	六八、四八五

支出

一會報　自一月至三月印刷費	壹壹、壹〇〇円
一會長歡迎會晩餐茶菓費	貳貳、七〇〇
一國漢、英語部會茶菓費	、五〇〇
一常集會茶菓費	壹、七〇〇
一通信費	九、七五〇
一書記六ヶ月分給料	壹貳、〇〇〇
合計	五七、七五〇
差引剩餘金	壹〇、七參五

右之通相違無之候也

大正五年二月　早稲田中等教育研究會

學生會合

◎法科懸賞討論會

拾貳月十一日（土）午後一時より講堂に於て小山博士出題にかゝる左記問題につき討論を開始せり。

此日好晴の小春日和にして、御大典其他のために控へ居たる法科學生の意氣は、遺憾なく發揮せられ、會衆約五百名にして來賓の重なるものは、司會者法學博士小山溫教授、法學博士中村進午教授、早稲田大學法學士井上忻治教授、早稲田大學法學士寺尾元彦教授、校友早稲田大學法學士大橋誠一郎氏、校友渡邊代五郎氏等の諸士にして氣焔大に揚る。

問題　癸は三男子を有し次男は一旦分家したが三男出生後に復歸せり而して其後癸は死亡し長男も亦死亡せり、癸の家督は何人が相續するか但長男に子なし

小山博士、先づ積極說論者卜部君を麾く。氏の議論は民法九百七十二條を根據とし、次男が甲の家に復歸せしは民法第七百三十七條の親族入籍の規定に依りて、入籍したるにより三男は次男のために親族權を奪はるる事なしといふ。次に消極說の稻森哲夫君を麾く。氏は復籍はこれ親族入籍の規定たる第七百三十七條の適用を受くるものにあらずして民法第七百六十二條廢家の規定によりて當然復籍するものにして、從て九百七十二條の適用を受けざるや明かにして、類推的論法を用ひたるが、意氣流石に愛す可きものあり。

次ぎには積極說の柏木銳男君をさしまねく。氏は開口一番、法典を朗讀し專ら前者の言を布演せるに止まれり。次ぎに消極說論者の大澤君を麾く。氏は民法第七百九十條家督相續に關する相續順位を說明して、長幼序ありといふ語を頻りに振りまきて、吾が親族法上の根本を說明せんとしたるも、惜い哉立論の根據薄弱にして要點を失したるは遺憾の極みなり。次ぎに積極說の論者谷名君を麾く。氏は判例を說明して、吾が大審院の判決は正に本條の適用を明かにしたるものなりと說明したるも、理由、何れにあるかを闡明せず。次ぎに消極說の論者小笠原幸彦君を麾く。氏は現行法の缺點を指摘して此重大問題を漏脫せし立法者の不注意を詰責する事甚だ銳どし。而かも其論理の終始一貫せる所は又以て吾が法科此人ありといふ事を思はしめたり。次ぎに積極論者小瀧辰雄君登壇し、大いに積極論のオーソリチーを以て自から任じ、反對論者をして顏色なからしめたり。氏の立論は專ら第九百七十條と九百七十一條との關係は、斯くの如き場合に於てのみ其實用あらしむる事を豫期して、立法者が斯くの如き明文を置きたるものにして、殊に現行法中他家より入る場合に於ては親族入籍の規定に依るにあらざればこの次男が入籍し得べき規定なかるべし。是れ家族制度を重んずる吾が古來の美風を維持せんが爲に斯くの如き明文を置きたりとなす。又判例を引用する事夥しく其消極論を駁して完膚なからしむ。然れども親族權の本質を論ぜざると、吾が古來の美風たる長幼序ありといふ特別なる慣例を無視したるは、氏のために惜しむ所なり。去りながら氏が終りに臨み歐洲大亂の際に於て家督相續を研究して吾が國基を益々强固ならしむる趣意を以て本問題を提出されたる吾が小山博士に對して一片感謝の意を表する旨を述べて喝采裡に悠々壇を下り衆目を惹きたり。

次ぎに消極說數番あり殊に萩野君の論旨は稍や要を得たるも其他は前辯士の說明を敷衍し、若しくは冗語を弄したるに過ぎず。尙積極論者中、桑原、横尾、中野、高木君等の說は論理明確傾聽するに足るものありと雖も、玆に之を省略す。

時に五時三十分。小山博士、徐ろに立ちて學生の辯論は之を以て終決とし、校友諸君の高說を聽かんと宣せられたり。

玆に於て早稲田大學校友大橋君壇上の人となり、徐ろに口を開いて自から消極說を取るの止むを得ざる旨を極論せらる。氏の論旨は民法九百七十條家督相續の開始に於てば、長幼序ありといふ、一大原則を固守せるは是れ何人と雖疑はざる所にして、其特例を設けたるは家督相續權が特殊なる新入者のために、害せらるる事なきを慮りたるにすぎず。七百卅七條は次男が分家を廢して舊の家に入る場合に適應さるべき條文にあらず。特に本條は戶主の親族にして、家にあらざる者例へば私生子其他嫡出子以外の者が入籍すべき場合の規定にして、これを歸化の例に比するも尙且、同樣なる論理に達すべきものなり。然るか故に次男が本家に入りたる時は元の身分を恢復するものにして、親族法上當然家督相續權を三男に先きたちて家督相續の順位にあるや疑なき所なり。

次ぎに校友辯護士渡邊君登壇。音聲朗に積極論を主唱すると懸河の辯もかくやと許り聽衆肅然たり。氏の論理は法律の解釋に重きを置き法律家は法律の前には屈せざるべからず。解釋の最も嚴正なるは明文を置いて他になし。然るか故に、本問の如きは、九百七十二條及び七百三十七條の條文昭々乎として存在する以上は、如何に法律家が之を變改せんとするも又得べき所にあらず。然るが故に、判例又玆に出でたるなるべし。余は此論に對して

は唯次男が他家より出でたる事實あれば、三男が相續權を主張し得ること之れ法の明定する所なりと極論し、積極論者の無限の喝采裡に壇を下られたり。

次に小山博士は徐ろに進み、出題者たる責を全うするため、聊か本問題を諸君に紹介すべしと前提せられ、且つ本問は十數年來の懸案たる事を開陳せらる。元來本問題は、次男が相續すべきか、三男が相續すべきかと、門外者に問はゞ、何人も次男なるべしと答ふるに相違なきも、法律は特に九百七十二條を置きたるために、法律家を始め、多くの實務家をして、三男が相續權ありと主張するに至りしなり。然るか故に正論は積極說にして判例も亦然るべしと雖、不幸にして余は此不條理なる實際問題を解決するに苦しむものなり。余の僻論としては如何にしても、二男が相續權ありと主張したきものなり。今此論理を明かにせんとすれば、先づ第一に吾が國古來の慣例として、長幼其序ある事、及び家族制度の維持には、この一大原則が牢乎として動かすべからざるものなる事を立法者と雖、是を認め九百七十條の正文を置きたるものなるべし。この原則は如何なる場合と雖覆へすべからず。然るに九百七十二條を置きたるは、是れこの立法の趣旨を覆へさん事を欲したる立法者の意思なりと解する能はざるは勿論にして、この條文は特に戸主と戸主の家にある嫡出子以外の新家族が其家督相續の長幼の別による順位を破壞せんとする事を妨げんがために設け置かれたる條文なりと解釋することを得ざるにはあらざるなり。是れを以て見れば假令二男が親族入籍の規定たる第七百三十七條により入りりたりとするも、尙かつ適用なきものと言ふ事を得べきなり。又、七百三十七條に依り、入籍せざりしものなりとせば、九百七十二條の適用なきは勿論にして、今、問題たるべき七百三十七條を檢するに、七百三十七條は、戸主の嫡出子が分家をなし、是れが入籍に關する手續を定めたる規定を斷言する事も得ざるなり。何となれば、戸主の親族と記載せるのみにして、戸主の嫡出子が養子緣組、婚姻分家等の場合は別々に之れを記載せざりしにはあらざるを以て、七百三十七條は、例示的の規定とも判斷し得べきなり。然らば是を以て直ちに次男入籍の場合にも適用ありとは確言し得べからず。殊に分家の如きは、親族法上、眞の他家と同一視し得べきものにあらざるは、明明白々の事ならずや。是れを以て是れを見れば第七百三十七條も又疑なき能はず。玆を以て次男に相續せしむるも、是を拒むべき法文なきのみならず、慣例にも一致し適當なる事と思料するものなりと結論ありたる後ち、今日は本題につき辯士三十人以上もありて近頃の盛大なる討論會なりし事を深く諸君に對して感謝し、併せて來賓諸兄に厚く御禮を申上ぐる次第なりと述べられ、急霰の如き喝采を博され、更に本討論は懸賞たる定めなりしを以て止むを得ず賞品を渡す分類と其等差を附ける次第惡からず了承を乞ふ旨を述べられたる後ち左記五名に對して賞品を授與せられたり。

一等賞　大法三年　小笠原幸彦君
二等賞　專法三年　伊藤竹次郎君
三等賞　專法三年　吉永　半平君
四等賞　大法三年　高木　常七君
五等賞　專法二年　谷名　新一君
六等賞　專法三年　山尾　甫君

右終つて解散せしは午後七時頃なりき。

◉寄宿舍 梓會發會式

今上陛下　御一代の盛儀を行はせられ、萬民奉祝の至心至誠宇内に遍滿して御國の榮愈々進み、御旗の輝き愈々光りある昨年十一月二十二日吾等寄宿舍々生同人は深く鑑みる所ありて、辯論の錬磨、交情の敦厚を目的として舍長矢澤千太郎先生を會長に、教授永井柳太郎先生を顧問として、玆に梓會なる名稱の下に其の發會式を擧行したり。

稻門健兒の襟を正さしむる本會の名稱、梓は崇高なる人格と眞摯堅實なる雄辯を以て一世に重きをなし、大隈老伯、高田文相、天野學長と共に我が早稻田大學創立者の一人たる故東洋小野梓先生の通稱梓を採り、先生の雄大なる精神を偲ぶと共に本會をして稻門學風の源泉たらしめんとす。

元來何處の學校と雖も其の學風を代表し、學校精神の色彩を鮮明ならしむる者は、其の校の寄宿舍である。而して雄辯は早稻田特有の色彩である。當代の青年論客永井先生を始めとし、井芹繼志、淺川保平、櫻井兵五郎、山森利一、粟山博の諸氏を出し、早大雄辯會の權威とうたはれ、花と羨まれたるも吾が早稻田大學寄宿舍である。然るに最近數年內的充實に於ては大いに見る可きものありと雖も、吾人の誇る早大特有の色彩たる雄辯界に於ては、前記諸兄輩を最後として意氣更に揚らず。是れ吾人の默するに忍ぶ能はざる所、玆に於てか矢澤舍長の鞭韃奬勵に基き、目出度本日此發會式を擧ぐるに至りたるなり。

會員は政、法科は勿論文、商、理、工科の如き直接餘り辯舌の要を感ぜざる諸君をも包容し全舍生より成る。

會は舍內倶樂部に於いて開かる。と見る、演壇の左方に、先生の肖像を安置し、右方に、先生墓碑銘の軸を揭げ、場內は萬國旗をあやなす。會衆今更の如く故人の高潔なる人格を慕ふの情は一齊に肖像に注がるる眼眸に著るし。

幹事西岡竹次郎君發會の辭に於て本會創立の前記趣旨を述ぶ。次いで會長就任の辭を述ぶ可く喝采裡に矢澤先生登壇。梓の字義に就て漢學流に分解說明せられ、進んで小野梓先生は、梓の木の如く不屈不倒の人なり、其の先生を理想として居る諸君會員たる者七顚八起大丈夫の意氣を以て進む可きものなりと論じて會員を勵まし、會員演說に移るや左記各辯士何れも眞面目に、日頃研鑽の思想もて懸河の辯を振ふ。終りて舍友淺川保平氏、力の三方面は兵力、思想力、經濟力卽金力にしてバウァーの强弱は直ちに社稷の消長に關するが故に吾人は三方面の充實を計らざる可らずと論ぜられ、次に舍友井芹繼志氏、『古巢に歸りて』の題下に梓會は東洋會の弟分なり。本會員は世の龜鑑となり、進んで輿論の中心點たるの覺悟なかる可からずと吾人會員を奬勵せらる。次に學長天野博士、梓先生が當時波瀾重疊の攻海に在りて、盤根錯節の苦を嘗めながら、能く國家の爲に身を捧げ文明開發に盡力さるゝと共に、一方子弟の敎養に勉められし熱誠を說き、更に進んで、先生は演說を爲すに當り常に些細なる點にまで注意し、一言一句も苟くもせざりし事の實例を述べ、辯論を

練磨せんとする者の心を用ふ可き事柄に付き諄々示教する所あり。最後に本會顧問永井先生辯論の輕視す可からざるより、現代の辯論に誠意なきを示されたる後ち、嘗て學生時代天野學長を會長として經濟研究會なるものを組織し、大に辯論を闘はしたる昔を語り、本會も其れの如く少しく討論を爲すの要ありと注意され、舍生演説の批評に入りては、一人〳〵に付て嚴密なる注意を與へられたり。終つて加藤喬樹君の閉會の辭ありたる後茶菓の饗應ありて十時半盛會裡に散會せり。當日の會員出演辯士演題並に本會々則左の如し。

憂國の叫び　金井勇君
我は豫言の實現者也　河井常三郎君
小さき叫び　遠藤金吉君
大隈内閣の歴史　小山秀彌君
言論の自由　除永綠君
所感　眞鍋金次郎君
水力電氣と其の應用　岡田傳次郎君
人爵の貴を知れ　和泉慶三君
國民超脱の秋　加藤喬樹君
藝術的人格　工藤直太郎君

梓會々則

第一條　本會は早稲田大學寄宿舍梓會と稱す

第二條　本會は辯舌を練磨し以て國家有用の人材を養成すると共に會員相互の交情を厚うし他日相提携し新文明の氣運を促進するを目的とす

第三條　本會は會員を分ちて正會員特別會員とす但し正會員は早稲田大學寄宿舍々生有志とし特別會員は本會出身者にして早稲田大學卒業生とす

第四條　本會は會長一名副會長一名顧問若干名及執行幹事參名を置く正副會長は正副舍長を以てし顧問は幹事の推薦による幹事は會員の互選により六ヶ月を以て任期とす幹事は其期間全責任を以て會務を處理し顧問は辯論の指導に任し正副會長は協議に參與す

第五條　本會の基礎を鞏固にし目的を遂行する爲め正會員のみより毎月會費金五錢を徴收す會費は舍費納入の際會長に納め保管は會長に委托す

第六條　會長は大會に於て幹事をして其收支決算を報告せしむ

第七條　本會は春秋二回大會を開き毎月一回十一日（小野梓先生永眠の日）に例會を開く大會の期日は幹事これを定む

第八條　本會員にして會規に違反するの行爲ありたる時は本會は適宜の處置を執る事あるべし

第九條　本會は早稲田大學寄宿舍を以て住所とす

第十條　本會は大正四年十一月一日を以て効力を生ず

附記＝大變後れて申譯ありませんでしたが係りの者が多忙であつた事を會員諸君の御諒察を請ふ次第である。（會幹申す）

◉社會政策讀書會消息

▲第四回例會　十二月三日午後七時より北澤先生宅に於て開會。本日の論題は「倫理ト經濟」にて、山崎君司會の下に討究に入る。先づ武正次君本問題に關する鹽澤先生の論文を約三十分に亘つて解説し、合せて君の意見を附け加へらる。次に村上幹二君、倫理は後にして經濟は先きなり。所謂衣食足つて禮節を知るの諺の如く、生活の基礎なきに倫理の確立を求むるは礎なきに家を建つるが如きものなり。眞の經濟眞の倫理は兩者の調和されたるときに始めて存立すと結論さる。次に福里次作君、前者と全く反對の立場に據り、經濟は後にして倫理は先きなり。換言すれば經濟は常に倫理の上に打建てられざるべからず。云々。次に高橋玄吉君倫理は人間生活の全面を支配すべきものにして、倫理の主義は普遍的性質を有す。故に經濟は當然倫理主義に反せざる限りに於て存立すべく、又倫理は人間生活の一面たる經濟生活を無視して、其普遍的性質を有する倫理主義を作出し或は實行するが如きは、吾人生活上に有する其權威を殺滅する者なり。眞の倫理は經濟を無視するを許さず、眞の經濟の範を越えて存立するを得ざる者なり。故に倫理は經濟生活の進歩に伴ひ其内容の一部的改造をなすべく、經濟は倫理の提唱する方向に向つて經濟主義に依る極端なる發展を調節せざるべからずと、次に八木知一君、開口一番、人間は社會的動物なり、故に道德的動物なりと説き起し、經濟と倫理の問題は肉の問題卽ち物質對精神の問題なることを力説し、前論者等が肯綮を逸したるを難ぜらる。次に司會者山崎浩君、諸論者の意見を取捨して本問題に對する結論を述べ、終りに北澤先生、有名なる經濟學者等の説を比較論述せられ、合せて先生の意見を述ぶる所ありたり。出席は北澤先生の外山崎、武、村上、福里、八木、高橋の六氏。

▲冬休休業中の研究　本會々員は冬期休業中の閑暇を利用して社會問題の實際を研究せんとして、工場、病院、學校、諸慈善團、貧民窟等を視察せり。而して左記の通り報告書呈出されたるを以て、次の例回より各視察者の報告ある筈。

スラムの研究　山崎浩君
同　稲津秀光君
同　高橋玄吉君
函館船渠會社視察　福里治作君
大阪鐵工場因島分工場視察　村上幹二君

▲第五回例會　一月十八日午後七時より、新年親睦會を兼ね開會す。本日は別に討究すべき問題提出され居らざりしを以て、會員福里治作君より、函館船渠會社に於ける勞働情態に關する視察談を聞く。報告終りて後ち茶菓の饗應を受け、互に胸襟を開きて談笑し十一時頃散會せり。出席者十一名。

▲遠足會　本會々員は大正四年十二月二日瀧の川方面に遠足を試みた。其日は恰も觀兵式當日で、朗な都の空には歡喜の色が滿ち充ちて居た。午前九時半頃大塚終點に集合した會員は、會長北澤先生を擁して、三々五々賑やかな街から狹い田舍道へと、晩秋の氣の溢る、廣い武藏野へ出た。彼方此方と、紅葉の林や枯野を縫つて瀧の川に入つた頃は十一時過ぎ、人淋しき園内に時ならぬ人の群リステッキで落葉を搔雜ぜるやら、枝に掛れる澤山の短册を見て、ゼミナリヤンが理窟つぽい解釋を下すやら、散り敗く紅葉の上を散々歩き疲れたる後ち、月並な茶店に上つて辨當を開き、澁茶を喫しつゝ、談論風發、大いに氣焰を揚げ、時の移るのを知らなかつた、歸途は烏飛山より田端へと談笑しつゝ、上野の山に出た頃には、短い秋の日は落ち、金光雲間よ

り亂射して夕の空を彩る壯美に心を奪はれつゝ、再び賑かな街に出で某旗亭に立寄り夕食を共にして散會した。人數の多い商科の内にもこうしたゼミナリヤンが互に親みと溫みを包擁しつゝあるとを特記したい。（以上G・T・稿）

▲石川島造船所訪問　會員山崎、武、稻津、鈴木、高橋、村上の六名は、十二月廿四日職工の勞働狀態研究の目的を以て石川島造船所を訪問す。先づ技師に面して參考となるべき事柄を聞きたる後ち、工場内を巡視して親しく職工の勞働狀態を目擊し、少からざる利益を收めて辭去せり。（M・M稿）

●支那協會一月例會　支那の天地風雲漸く急之が爲に本月例會速開の議頻に起る。依て十六日の日曜日を卜して千葉縣東葛飾郡葛飾村山野淺間山上に於ける青柳會長の新居なる時雨山莊に開く。此日天氣晴朗遙かに東京灣を隔て、房總の山々も一望に眺め得べく、風もなければ屋外自然の庭園を會場に當てたり。何分新春初頭の會合で、殊に常會と異り、會員來會者六十餘名の外、志を同うせる高等師範學校學生三十六名及び早稻田實業學校學生八名、加ふるに葛飾村長井上六郎氏を筆頭に同村山野區々長平野一氏以下同村小學校長教員名譽役員及び青年會員等七十有餘名の出席ありたれば、之れには吾協會員を合し二百餘名の大參集を爲せり。庭前の小高き芝生に立ちて青柳會長の挨拶ありて後晝餐の饗應ありて食後八木幹事開會を宣するや、高師の山之内君立ちて「我輩の教育方針」と題し實例を以て適切に其抱負を述べ、苟も我國をして東洋の盟主たらしめんとするには、大國民を養成せざるべからず、之れ吾人の天職なりと結び、實業の杉浦君は村民としての青柳先生に對する希望を述べ、終つて一同記念撮影を爲し、茶菓の饗應を受く。饗終りて再度開會。渡幹事長青年の意氣に就て萬丈の氣焰を揚げ、大に一同を刺激し、次て急霰の如き拍手に迎へられ井上村長登壇。言々句々皆肺腑より出で熱誠人を動す者あり。折柄密雲來り、やがて雨となりしも、雨に濡るゝを厭はず、聽聞せり。是れ全く井上氏人格の然らしめたる所なり。終つて雨漸く烈しければ表座敷に入る。我が校の上田君「農村青年の覺悟」と題し、都市集中論に對し、各方面より反駁を試み、農村疲弊の救濟は金融機關の完備及び信用組合の設置にあり。斯くして農村の振興を圖らざる可らず、農村の興亡は國家の興亡なりと論結して降壇。高師の某君農村の疲弊救濟を教育上より觀、農村思想統一は最大の急務なりと結論し、最後に青柳會長は會衆の熱心なる希望に因り、時局問題に就て約二時間に亘る大講演あり、其說く處丁寧懇篤何れも肯綮に當り、人をして思はず首肯せしむ。司會者閉會を宣せるは午後五時半、一同隨意解散す。山雨何時しか止み、暮雲淺間山上に滿ち、塒を求め行く鳥、鎭守の森に消え行くを見たり。（當番幹事）

◉教友會消息

▲評議員及幹事會　本會は一昨年來大講演會並に各宗に於ける代表的佛典の研究會を開き頗る良好の成績を擧げ來りしが、尙ほ本年度に於ては、從來の經驗に基づき現時の精神界に對する積極的運動を開始するの抱負を以て一月十六日午後六時牛込區原町綠雲寺に於て評議員幹事會を開けり。來會者中の長老權田雷斧師を座長に推し監督より提出せられし議案に就て逐一討議し左の諸件を可決す。

一、監督の交迭　從來常任監督として多年本會の事業を統率誘導せられし土屋詮敎氏一身上の都合に依り辭任せられたるに依り早大文學士木山十彰氏をその後任に推すこと。

二、會場の變更　從來本大學の講堂を以て專ら本會の會場に充てしが、本年度よりは大講演會を除く外、毎月例會は左記の所にても開くこと。牛込區原町綠雲寺（柳町電車停留場より北約一丁）

三、事務所及び圖書部　市外戸塚町字諏訪二七至心學寮に置くこと。

四、前監督に對する謝意　前監督土屋詮敎氏多年の勞に對し本會はその謝意を奉せんが爲め何等かの方法を採るべく全員一致可決但しその方法は幹部に一任すること。

五、釋尊降誕會　本年度より毎歲本大學に於いて之を擧行すること、尙ほ大日本佛敎青年會の各大學合同々祝賀會は本年本會之が當番主催者たるべし。

六、新評議員推薦　早稻田大學寄宿舍々監茂木剛三郎氏、綠雲寺住職佐々木馨師を本會評議員に推薦すること。（以上）

尙ほ本年度研究會の方法及び講本等に就ては愼重なる考究を要することあるを以て之れは宿題となし、二月五日（第一土曜）研究會後引つゞき前記綠雲寺に於いて更めて評議員幹事會を開き之が討議をなすこと、せり。當日の來會者は左の諸氏なりき。

權田　雷斧　中桐確太郎　武田豐四郎　土屋　詮敎　塚本　賢曉　大内　俊　小森　彦次　木山　十彰　茂木剛三郎　南　守一　吉本　次吉　佐々木　島田　勉　本庄　主一　水智　立覲

▲大講演會　一月二十二日午後一時より本大學第二十敎室に於て開催。先づ學生水智幹事開會の辭を述べ、次に土屋講師本會監督を辭し、新進の木山氏を後任に推擧したる趣旨の挨拶あり。それより左の講演あり。來會學生三百餘、敎授講師校友賛助員十數名も加はり盛會なりき。

一、生くる力の宗敎　校友本會監督　木山　十彰氏

一、宗敎の根本義　本大學敎授　武田豐四郎氏

一、偉人體驗の宗敎　東洋大學敎授　境野　黃洋氏

一、科學的宗敎　文學博士　醫學博士　富士川　游氏

◉越佐會　越佐兩國出身の校友學生より成る同會は其の第二百二回春期大會を一月廿九日午後四時より飯田河岸富士見樓に開く。會する者文學博士吉田東伍、前代議士增田義一、昆田文次郎、宇都宮鼎、天溪長谷川誠也、御風相馬昌治、大江乙亥門、本田信敎、小林堅三諸氏を始め會員約百名。席上委員大橋氏開會の辭に次いで、會長市島謙吉氏病氣欠席に就き本田信敎氏代りて、同會倶樂部維持に關する報告、及び同會の維持發展に就ての希望を述べたる後ち、吉田博士、宇都宮兩氏の有益にして且つ興味深き演說あり。更に會員諸氏交々起つて萬丈の氣焰を吐き、やがて開宴。年來の愛顧に酬ひんとて樓主の寄附に係り

たる富士見樓踊り、竝に薩摩琵琶の餘興に感興を惹きながら一同献酬歡談を恣にし、果ては幹事の氣轉に依る面識を兼ねたる自己紹介に欝勃禁ずべからざる餘焔を揚ぐるなど十二分の歡を盡して十時散會せり。

◉佐賀縣早稲田正風會　佐賀縣出身學生の組織に成る同會は、昨年十一月下旬其の發會を擧げ、會長天野學長出席有益なる訓話を與へられ、青年の正に踏まざる可からざるの道を說示せられ、會員一同體得する所尠からざりしが、更に本年一月二十九日午後二時より角屋樓上に於て其第二回例會を開催す。會する者會員二十餘名、幹事開會の辭を述べ、次いで藤山先生、『獨逸國民性の研究』と題して、「眞に獨逸が今日世界の覇王とならんとするの有樣は之れ寧ろ當然の結果たり。何となれば其の內面に於て彼等が奮鬪し努力し研究しつゝある事の絕大なりしを以てなり、吾人取つて以て之れを範とせざる可からざるなり」との趣意を述べられ、次に原口先生、『エネルギーの說』の題下に「深遠なる學理と敬虔なる宗教心とに依りて、長大足の進步をなさんとするものは宜しくエネルギーの蓄積と有効的使用に注意せざる可からず」と論ぜらる。吾人實に共鳴を感ぜざる能はざりき。最後に『武士道の崩壞より來る懷疑思想』と題したる木山校友の熱烈にして然も興味津々たる演說あり。やがて晩餐會に移り、歡談の裡に晩餐を共にし、食後更に座談を恣にし、西岡、原口の二先生は我々の爲めに遲くまで胸襟を披いて談笑せられ、愉快極りなき間幾多有益なる談話を與へられたるは會員一同感謝に堪へざる所なりき。九時散會せり。當日出席せられたる本會贊助員諸氏左の如し。（無津呂一郎報）

藤山先生　原口先生　西岡先生
久松先生　木山校友　古賀校友

◉大阪同攻會消息

▲第十一回例會　十二月十二日日清生命社內に開會。出席者十四名、先づ國澤幹事の開會の辭竝に會務報告ありたる後、左記有益なる演說あり。

一朝鮮施政五週年所感　小原是馨君
一青年の覺悟　和田和一郎君
一至誠の權威　池上宇一君
一所感　校友國澤照光君

右終りて討究宿題たる「青年危機の研究及其修養法」に就いて小原、橋本、和田、岡本、國澤諸君の意見發表あり。或は科學研究、或は歷史的研究、或は經驗談あり。何れも皆傾聽に値するものゝみにして裨益する所尠少ならず。十一時半閉會。

▲新年茶話會　一月九日午後六時より日清生命支社內に開催。當日は雨天且つ宵惠比須の事とて出席者は比較的少く、漸く二十七名を算ふ。國澤幹事先づ開會の挨拶をなし、次の如く多數の演說あり。又餘興としては天外原君の最も得意とする講談ありたり。題は中江兆民居士にして、彼不羈磊落或時天外より來る底の奇想を凝し、一日時の內務卿をして自己の馬車の御者を勤めしめたる等、到底常人の企及すべからざる彼の人物を語り、非常なる喝采を博せり。氏は嘗て講談を以て滿清を歷遊せし丈けありて、一同をして感歎止む能はざらしめたり。後茶菓の饗應福引等あり。十分歡を盡して十一時散會せり。

一、病に臥して健康の幸福を思ふ　和田和一郎君
一、男兒の本領　原天外君
一、日本の現在と國民の覺悟安達龜造君
一、辛抱の必要　池上宇一君
一、武士的精神　功能憲吉君
一、先輩に賴るも恥ならず　濱田德松君
一、救貧問題に就て　小原是馨君
一、高遠なる理想　神崎米一郎君
一、一九一五年を送る　黑川善次郎君
一、青年義勇國　國澤照光君

各自其熱辯を振つて或は青年の元氣を皷吹し或は支那の研究を奬勵し、又或は社會の改良を叫び、或は吾人青年は確乎たる理想を立てゝ之に向つて突進すべし等、新年に際し元氣橫溢實に盛會を極めたり（會幹事報）

次回例會左の如し

一、日時　二月十三日午後六時より
一、場所　西區信濃橋交叉點日清生命支社
一、宿題　（一）現代生活の改善方法
　（二）青年の遊戲及娛樂
一、其他特別講演（講師未定）

大阪市北區老松町二丁目小原內
大阪早稲田同攻會

本會事務所を下記に移轉す郵便物竝に一切の通信は自今下記宛に御願仕度左樣御承知被下度願上候

運動

◉野球部冬期練習

十二月試驗の終了した廿一日安部部長河野先生以下廿名の我野球團一行は、冬期休暇を利用して大阪豐中運動場へ練習の爲出發した根據を寶塚松樂館に構へ、日々箕面電車を便りとして運動場へと通つた。

之れより先き我野球部の關西に冬期練習を爲すと聞きて挑戰をするもの十數校。我校悉く之に應じ、廿四日の關西大學を始めとして今年六日奈良に於て明治大學と試合するに至る迄、十四回に及んだ、以下其の經過を略記するに、

▲廿四日　關西大學と戰ひ十一對零にて之を破る。

關西		校本	
島井	安打二	藤田	加飯
井伺	四死球二	山伯	橫佐
田林	三振七	岡	市
倉本		趙	
柳		井花	豐藤
池小		島笠	臼鵜
米山		島川	池小
6	6	6	6
7	9	9	7
5	7	7	5
6	5	5	6
1	2	2	1
2	8	8	2
3	3	3	3
9	4	4	9
4	1	1	4

▲廿五日　午前十時より近江銀行チームと戰ひて二十五—二にて勝利を得、午後は二時より明星商業と橋本市岡のバッテリーにて之を迎へ、猛打に猛打を加へて二十七對零の差を以て退く。

▲廿六日　午後二時桃山中學と河野先生審判の下に試合開始、桃山のバッテリー奮鬪せしも其の効なく十四對零にて破れぬ。

▲廿七日　午前十時より關西大學と第二回戰を行ふ、復仇戰も爲すなく十四—〇にて我校の勝利となり午後は北野中學と對戰せしも之を二十對零の大差にて破る。

▲廿八、九兩日　我部員を二分して練習試合を行ふ。

▲卅日　關西諸中學の覇者市岡中學と午後

一時より戰ふ、成績左の如し。

岡市	永田	安打	校	藤山	安打
	島	四球		加横	四死球
	中	三振		趙	三振
	井	得点		飯市	得点
	野	二		田	九
	本	四		岡	四
	本	二		井	二
	田	二		井	一
	富	六		島	六
	町	四		岸	四
	中	一		笠	一
	田	七		花	三
	梅	八		市	振
	松	五		臼	点
	松	二		伯	一
	岡	九		飯	四
	山	三		横	死
	山	四		加	球

大正五年一月一日和歌山中學と中學方に試合の豫定にて和歌山市に至りし處、折惡しくも降雨となりし爲め和歌の浦に一泊なし、

▲二日　午前十時より第一回戰開始、和歌山善く戰ひて我攻擊をして恣にせしめず、結果八對四。

和歌山	奥	安打	校	藤山	安打
	小	得点		加横	四死球
	長	三振		趙	三振
	矢	四死球		飯	得点
	中	五		田	七
	小	四		伯	八
	丸	四		市	三
	谷	四		花	四死球
	山口	安打		笠	十三
	山川	四		橋	振
	岡	四		市	三
	部	二		臼	四死球
	筑	一		伯	十三
	原	六		飯	振
	笠紀	二		横	三
	山口	二		加	四死球

第二回戰を次で行ひしも、本校の猛打に十五對零の大敗を招くに至れり。

▲三日　豐中にて四條畷中學を二十三對零にて破る。

▲四日　奈良公園に於て冬期練習に餘念なき明治大學軍を迎へて戰ひぬ。苦戰の結果九對五にて勝つ。

明治	原	安打	校	藤	安打
	村	四死球		加	四死球
	藤	四犠牲		横	四犠牲
	塚	過失		趙	過失
	澤	盗塁		飯	盗塁
	門	得点		田	得点
	野	三		岡	三
	本	四		井	四
	尾	七		井	七
	大	三		島	三
	中	四		岸	四
	安	七		笠	七
	海	一		花	一
	大	五		市	五
	大	二		臼	二
	淺	五		伯	五
	根	九		飯	九
	西	九		横	九
	老	六		加	六
	3	3		校	3
	8	8		本	8
	6	6			6
	2	2			2
	1	1			1
	9	9			9
	7	7			7
	5	5			5
	4	4			4
	本校	入じ			前回投手
		同み			
		島の			
		川と			

雜報

◉大隈首相の光榮　畏き邊りにては大隈首相が御大禮に關し日夜寢食を忘れて恪勤奉仕したる勞苦を思召され一月二十五日宮中豐明殿に於て御陪食仰付られたる後特旨を以て別殿に於て左の如く恩賜の御沙汰あらせられたり

御紋章附蒔繪文臺　一基

◉大隈首相の遭難　大隈首相一月十二日夜宮中豐明殿に於ける露國太公殿下御歡迎の夜宴に參列し、十一時過ぎ退出、同三十分頃牛込區山吹町一四〇番地先に差蒐りたる際、爆彈狙擊の難に遭はれたるが、兇漢の投付けたる爆彈は二個に及べるも、幸にして爆發するに至らざりしを以て、何等の損傷なく無事歸邸せられたるは大幸なりき。爾後右犯罪關係の嫌疑者として捕縛せられし者四五名に及べり

◉私立大學幹事新年宴會　一日十八日午後五時日本橋區小常盤に於て、私立大學幹事新年宴會を兼ね、試驗制度改正の件に付協議會を開き、同九時半散會を告げたるが、當日出席者左の如し。

日本大學　加藤久米四郎
中央大學　佐藤氏代理
早稲田大學　川口潔
明治大學　田島義方
專修大學　櫻井義廉

◉吉田、北原兩氏歡迎會　一月十八日午後五時より日本倶樂部に於て、曩に米國及歐洲に留學せる教授吉田良三氏及米國ダイヤモンドマッチ會社の特派員として、東洋視察に派遣せられたる、校友早稲田大學法學士北原淑夫氏の歡迎會を催せり。定刻に至り先づ、天野學長一場の歡迎の辭を述べ、吉田氏は謝辭を兼ねて感想談を語り、北原氏は同じく自己の現在の立場及び將來の抱負を談じ、主客胸襟を開き歡談數時九時過ぎ散會せり。當日出席人名左の如し。（次第不同）

天野爲之　鹽澤昌貞　田中唯一郎
浮田和民　中村進午　渡邊亨
永井柳太郎　金子馬治　大山郁夫
埴原正直　小林行昌　柳川勝二
吉田東伍　中村康之助　藤山治一
寺尾元彦　昆田文二郎　齋藤隆夫
平沼淑郎　神尾錠吉　高田俊雄
杉田金之助　井上忻治　高橋三郎
中村康之助　佐藤正

◉母國觀光團の來訪　米國デムバアー市在住の同胞福島太郎氏を始め約三十名は、過般來母國觀光中なるが、一月二十七日午前八時、大隈總長邸を訪問し、安部磯雄氏の案内にて伯庭園の春趣を賞し、後ち溫室にて茶菓の饗を享く。席上大隈總長『富は力なり』との趣意を述べて歡迎辭に代へられ、更に表玄關前にて一同紀念撮影を爲し、夫れより本大學を訪ひ、校内を參觀したる後恩賜紀念館に於て歡迎茶話會を開催せらる。天野學長の歡迎の意を兼ね、世界的經濟に向ひたる日本將來の隆運を豫想して觀光團員一同一層の奮起を促し安部運動部長挨拶を兼ねて、先年、本大學野球團渡米の節の謝意を表し、更に總長銅像前にて紀念撮影あり十一時過ぎ、一同辭去せり。

◉日清生命の本大學幹部招待　日清生命保險會社重役諸氏は、一月十七日午後五時より、赤坂三河屋に於て、過般新に就任せられたる本大學々長天野爲之氏、並に理事鹽澤昌貞、田中穗積、田中唯一郎、早稲田中學校長平沼淑郎、早稲田實業學校長杉山重義諸氏を招待し、一夕の祝宴を張れる由なるが、當夜主人側は、日清生命の今日あるは早稲田大學の庇護に依る事勿論なれども、今後も尚益々會社の爲に助力せられたしと述べ、之に對し、來賓側は、日清生命と早稲田大學とは元來緣故淺からざるものなれば、會社の發展は我々も等しく庶幾する所なりとの應酬あり。夫より主客打ちくつろぎて酒宴に入りしが、十時過ぐる頃十二分の歡を盡して散會したりしと云ふ。因みに當夜會社側の出席者左の如し。

池田龍一　牟田口元學　山田英太郎
增田義一　前島彌　田中小太郎
酒井谷平

◉日清生命支社出張所長の大隈伯訪問　日清生命保險會社出張所長一同は、過般招集せられたる支店會議の爲め出京せるを機とし、去る一月二十二日池田田中兩重役及田中主事と俱に早稲田大隈伯邸を訪問し、親しく總長伯に面謁の上、過般總長伯遭難の見舞を陳べ且つ有益なる談話を承りて辭去せりといふ。

◉野口博士よりの謝狀　理醫學博士野口英世氏が昨年十一月三日來訪の事は前號に記載したる所なるが、今回在紐育なる同博士より鹽澤理事に宛て左の謝狀を寄せられたり。

謹啓向寒之候賢臺愈々御清適に被爲遊爲國家奉遙賀候偖而小生出發前は御邪魔に罷出で一方ならず御厚遇に預り以御蔭有名なる早稲田大學の面影を拜觀せしは小生の幸福不過之其機を得たりしを自から祝し居申候殊には大學に關する文書並に大隈伯の論文著述等まで拜領深く御禮申上候右恭しく御禮申述候尙諸教授各位にも賢臺よろしく御鳳聲願上候恐惶敬白

大正四年十一月廿九日　野口英世

鹽澤昌貞樣

侍史

追伸　小生一昨日無事到着仕候間乍他事御休心被下度奉願上候

◉生稲忠兵衛氏の寄贈　今回在桑港、生稲忠兵衛氏より彫刻界の泰斗高村光雲氏作の大隈總長フロック姿立像の木彫り（高さ二尺）一基を本大學に寄贈せられたり。

◉故桂井講師追悼會　高等豫科H組は客臘逝去せられたる講師桂井當之助氏の追悼會を一月二十二日午込矢來倶樂部に催す。會するもの遺族側より故人の母堂、令姉、令姪、知己側より安部、渡、服部、吉田（源）中村、の諸先生及び學生壹百。定刻に至つて委員伊部唯一氏登壇、開會を宣し「我々は故人を忍ばんがため玆に追悼會を催しました、而して自信の人、努力の人であつた故人の靈を慰めるには我々が只今より自信の人となり奮鬪の人となるにあるのである。諸君夫れ努めよ」との意を述べて降壇するや、安部高等豫科長登壇し、故人が自信力強き人であり努力の人であり、更に氣根の人である事を稱贊す。次で渡、服部、中村の諸先生交々登壇、少壯にして逝ける故人の天才を惜しまれたり。尙ほ學生側よりは光瀨正一、須藤德夫の兩氏恩師の追懷談を語り、終つて餘興に移り、講談師若燕、第十一師團長當時の乃木大將を演じ、佐藤少將未亡人、南部坂雪の別れの筑前琵琶の演奏あり。四時半委員北川武三郎氏閉會を告げ、一同故人の祭壇に向つて禮拜す。最後に故人の母堂起ちて一同に挨拶を述べらる。寄る年波にいたくも衰へさせ給ひし老の身の、述べらるゝ挨拶も涙がちに、さらぬだに故人を偲ぶ吾等徐ろ暗涙を禁ずる能はざりき。薄暮散會せり。（一委員）

◉一戸講師母堂の逝去　講師理學博士一戸直藏氏母堂、一月十八日逝去せられたり。

◉中西講師嚴父の逝去　講師法學士中西用德氏嚴父、舊臘逝去せられたり。

◉長田舊講師の逝去　舊講師秋濤長田忠一氏は昨夏南洋方面に旅行し、病を得て九月中旬歸朝、播州垂水に於いて病氣療養中の處、十二月二十四日午後卒然腦溢血の爲め遂に逝去せられ、遺骨一月九日東京驛着、同午前十時半谷中天王寺に於いて葬儀を執行せられたり。

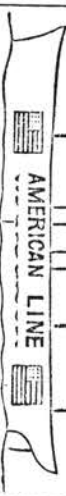
◉村井基金管理委員夫人の逝去　本大學基金管理委員村井吉兵衛氏夫人宇野刀自豫て病氣の處、藥石効なく遂に一月一日午前四時逝去せられ、同九日午前十時淺草本願寺別院に於いて佛式を以て莊嚴に執行せられたり。

◉家庭文庫の刊行　かねて讀書界に好評ありたる婦人文庫全十二卷は天覽臺覽の榮に浴し、全國各地方に亘りて一萬八千の會員を有するに至りたりとの事なるが、今回又更に嶄新なる計畫を立て、同會顧問を始め第一流の代表的執筆者の手に成れる家庭文庫十二卷を刊行する事となれる趣にて、其內容は修養、娛樂、經濟、衛生、育兒、童話、化粧、住宅、藝術、科學等、各方面に亘つて最も現代的實際的で、新しい思想の結論と近代科學の恩澤とに浴せんとする新時代の家庭に於ける恰當な文庫である。目下會員募集中で甲種會員（一時拂）金拾圓、乙種會員（二回拂）金五圓五拾錢づゝ、丙種會員（十二回拂）金壹圓づゝで、牛込南北社內の同會に申し込めば、說明書を無代で送呈するさうである。

通信

◉**紐育便り**（其一）…講師…留學生　中村萬吉氏

（上略）學校の講義は餘り利益無之樣見受候間大部分圖書館にて暮し居候成るべく早く渡歐の覺悟に候へ共歸來客の談區々にして頓と見當つかず依て過日大阪朝日通信員たりし校友丸山君の歐洲經由歸朝の途に就かれしを幸ひ同君より委曲歐洲の模樣報告し貰ふ事に致候現今は米英間汽船に獨探が爆裂彈を時置する恐れある爲め乘客の檢閱嚴重を極め居り丸山君の如きも旅券には寫眞を貼附し領事の裏書を要し、且携帶品は手提小箱の末に至るまでコネ廻して檢査され候、君の乘れるも吉田君のと同じくアメリカンラインにて同線の船はサイドニ



右樣の國旗及線名船名を標榜し、夜は之にイルミネーションを施す事に候隨分冒險的旅行に候、米國船のみは安全を保證され居候爲め、此のみは乘客滿員の姿に候へ共、其他の線例へばホワイトスター。キューナルド線の如きは船賃を大割引するに不拘、不景氣の由、アメリカンラインは船好しからず候へ共流石に背に腹は替へられぬものと存候（下略）

十一月廿七日　中村萬吉

前田幹事殿

◉**紐育便り**（其二）…留學生……毛利宮彥氏より……天野學長宛

拜啓初冬の砌愈々御健勝に被爲渡候御事と奉遙察候此地も日增し冷氣相加はり貧しき室內乍らスチームの通ひ始め申候私儀御陸を以て頗る健康にて中村兄と共に自炊生活の一員として忠實に飯炊きを相勤め居り候故何卒御安慮被遊度候

學校は九月廿七日より始業日々通學仕り居り當日の「ニューヨーク、ウホールド」紙はライブラリースクールに關する記事を掲げ、入學者七十五名、中一人の日本人、フヒンランド人、スウエーデン人ありと附加致居候は却て毛色の變りし故を以て存在を認められ候事と苦笑仕候玆に稍々意外に存じ候は學生中五名を除き他は凡て婦人に有之候事に御座候否學生のみに限らず教師の凡てが亦女性にて揭

示板にはサフラゼットの勸誘狀の貼附せられ居り候

教室はパブリック、ライブラリーの大建築の一階の奥に有之候事故、晝間と雖電燈を點じ申候かく晝夜の轉倒したる境に在りて、講壇より女教師の講義を聽き、周圍を圍繞せる同輩を見候時は全く別世界に突入したるが如き不可思議の感有之候

授業は每日朝の九時より平均五時間づゝにて一週に二回は授業後分館にて半日の實地練習を課せられ申候

課目はレフエレンスワーク。クラシフヒケーション。カタロギング、ライブラリーエコノミー。等を主とし、時々圖書館界知名の士の講演、當ニューヨーク、パブリックライブラリー內の有力者の科外講義等有之候是等の點に於て最も便宜を有するは此國の中心地に在る當校の誇の一つの由に御座候

今夏コロムビア大學出席當時に比し、講義は幾分樂に了解仕候へ共勿論十分にては無之候然し萬事實際主義の此國の學風として如何なる學課にも實習の伴ひ候故之に依り其不備を補ひ得候は誠に好都合に御座候但し此クラスに於ける教育の方針は大體市立圖書館々員の養成を主としたるものにして、私本來の目的よりしては多少不滿の點有之候處幸ひ此普通科終了者に限り入學を許す研究科なるものありて此中の一科には「中學及大學圖書館科」有之候間校長ミス、ブラマーと再三交渉の結果此科への出席をも許可せられ申候無論スペシアルスチユーデントとしての恩典に御座候之に依り圖書館の二方面たる學校圖書館及市立圖書館をも併せ研究し二ヶ年の修業期を一ヶ年に短縮すべく奮發致候、殊に該大公圖書館科の講師は兼て朝河博士より御紹介を得たるエール大學圖書館のキーオー氏に候間此クリスマスの休暇にはエールに參り親しく同氏の指導を受くべき手順に相成居候要するに此國圖書館の進歩は最早議論計畫の時代を過ぎて研究實行の時期に有之候僅と愚考致居候而して私日本より抱懷せし疑問の事項にして未だ解決されず稍失望致し候點も有之候へ共一方にまた意外の新智識を得べき事實の多々有之候は嬉敷限りに存候（下略）

◉米國便り……校友……留學生

猪俣津南雄氏

謹啓色々と御配慮を願ひました小生も、どうやら三千里の旅を了へて、目的地たる此マヂソン市に落付くことが出來ました。退京の砌、校友會並に教職員方の御催しにかゝる送別の會に御招き下すつたことを、留學手續旅行準備に要すべき一切の便宜の爲めに與へられた御骨折を併せて茲に改めて厚く御禮申上ます。

當市着の翌々日には、はや總ての手續を了して講義に出ることを得ました。（中略）此學校に來てよかつたと思ふことが今では二つ程あります。恩師鵜澤先生の第二のアルマメータである處から關係科目の諸教授が、此自分をも滿更他人といふ眼を以ては見て呉れず、御陰で餘分の便宜を得られるもの少くないといふのがその一つ。も一つは小生の主もな研究科目たる農業經濟學に、茲ではなか〳〵力を入れて居るといふことであります。此大學では廣義の文科の他に、農科と工科、此三つが其本體とも見られるのでありますが經濟學（廣義）哲學（同上）數學（同上）、なぞがそれ〴〵文科の一デパートメントをなして居る、即ち、斯學は、言ひ換れば、銀行論社會政策、乃至は、心理學、美學等と對等の位置にあるのではなく、之等を含む經濟學、哲學等と均しい地位に置かれて居る、少くとも形式上はその通りなのであります。更に之れを、三人の教授、九人の助教授で擔任して居る處を見ると、力を入れて居ると見えるのは、偏へに形式上からには止らぬといふことが明かになります。御承知の通り此學問は又性質上からも例へば哲學に屬する一二のものなぞに比べて、一人の深い先生を持つよりも充分な材料を與へてくれる豫かな設備を有つ方が、その研究生にとつて、却て利益であるといふ趣のないでもありません。何れにせよ、斯學の輕視されて居らぬことを少なからず仕合せに存じて居ります。クラスワルクは今の處、普通の講義は二時間に過ぎず、他の八時間はデスカッション、若しくはラボラトリワルクでありますが、それの準備になる仕事それの補助となる讀書の外の時間は、專ら言葉の稽古に費して居ります。馬鹿馬鹿しいと、厭やにもなる心を抑え〳〵やつて居ります。啞でも聾でもなくなるやうにとあせつて居ります。一度ならず二度ならず、字引と相談せれば出來ぬやうなことを、フォークなぞ使ひ乍らスラ〳〵としやべる小娘の横顏を、ぼんやり眺めてるやうなこともあります。兎に角半年仕事です。小生が唯一人の日本人、支那人は二十人程も居りますが、湖上でスケート出來る位に氷るそうですから、長い四月迄も續く冬が思ひやられます。今朝あたりは、霜月の半ばといふにはや初雪です、每日晴れてるのをせめてもの喜びにして居ります。大學町丈けに人氣は惡くないやうであります。こちらが控へ目にして居るせいか、まだ不快な印象は一寸も受けたことがありません。殆ど總ての誘惑物が此町から遠ざけられてあることと、人々が皆相應に親切にして呉れることは、專心な研究を容易にします。頑健であります。

十一月十四日、

猪俣津南雄

學長天野爲之樣

侍史

◉露國便り：教授：留學生：片上伸氏

拜呈その後先生には御壯健に被爲入候や御伺申上候今月の東京の新聞にて、先生御叙勳のこと拜承慶賀の至りに存上候小生幸ひに壯健勉學に取りかゝり居候間乍他事御放念願上候儲當地は一般に平穩にて勉學上の不便は無之大學中學諸學校は勿論圖書館博物館劇場等は平生と變りなく候爲めこの方面の不便は少く候へども唯物價の上騰は驚くばかりにて、食料品の如きも砂糖は三倍の高價にて尙且つ容易に得がたく、バタも近來時々店屋に品切となり申候食料品中パンの如きも戰前とは大變な粗惡にて大きさも三分の二位と成り居候由、乾肉もシベリアの停車場にて求めたる物の價格に比し倍又は一倍半に候由、且つ戰亂地の避難民多く來り貸家貸間は一層拂底を告げ一層高價と相成小生當市へ來り候後も十日間は容易に適當のもの見當らず、漸く唯今のところへ參り候も裏側とて終日ランプを用ひざれば讀書出來かね候次第にて、これにても一ヶ月室代だけ四十八ルーブルを拂ひ居り候、月末には何分健康上の事も有之今少し明るき室を探し轉居いたしたく存候

唯今は專ら語學を中心としてその傍ら書籍の材料蒐集と各方面に知人を作りつとめて瀕繁に往來交際いたす樣つとめ居り候、大學方面及び男女學生、二三の家庭には已に多少懇意に相成候、各種の智識と便宜とを得居申候、一般に男學生は怠惰にて極少數のみ拔群の秀才らしく大學の講義も三四人だけの學生に向ひて教授は熱心に講義をよむといふこと珍しからず候、而かも欠席者中には九分九厘迄のなまけものと一厘だけの自修者とを含み居申候、小生知り合ひの學生は大學へは出席せず、圖書館に日をくらし、極少數一二の教授に指導を受けて專門の研究（ギリシヤ哲學）に沒頭致し居候ものも有之候、一般に女學生は規則正しく正課を勉强し、忠實にセミナリーの問題等も準備いたし居候樣に見受け候、男女とも大學は純理論に專らにして理工科方面すら實用的ならずと聞及び候音樂か學ぶといふ女子大學生の如きも自分は理論音樂專門にて演奏はせずといふを多少得意といたし居

候樣にも見受候この理論的なるは、ペテログラード大學も同樣のやうに存候

文學方面は當地大學は專ら十八世紀迄の舊文學、ペトログラードは十九世紀以後の新文學に關する講義科目多くこれは新舊都の歷史上自然の勢と存候、隨つてロシア文學の傳說は先づモスコウに來りて知り、比較的理解しやすく材料も多き十九世紀文學を經て大體の目安を立てたる上にて、現代文學の中心地たるペトログラードに赴くを便宜と存じ初めは當市にて一年を過し、後の一ヶ年をペトログラードに費す豫定に有之候

然るところ上に申上候如く物價騰貴と防寒の準備等にて、一般の生活費はこの冬季に入りて一層膨張いたし吾等の如きも多大の影響を蒙り、上記室代を初め食料、交通費、語學敎師の謝儀、書籍費、各處の入場料等凡て戰爭の爲め普通の倍、一倍半少くとも五割增の有樣にて候、その上この國の習慣として各知人乃至公館等訪問の際はその門番取次人に一々茶代として十錢十五錢の心附を與ふる一般の習はしにて、これ等が案外學費を嵩むることゝ相成、今迄二ヶ月近くの經驗より臨時費を除き豫算を立て候時は、一ヶ月二百五十ルーブルは生活費及研究費として必要と存申候（下略）

大正四年十一月十八日　　片上伸

天野學長殿

侍史

◉巴里便り……校友……遊佐慶夫氏

久濶を謝する爲め玆に拙筆を執り日頃思付の儘學窓一話を作るに至つた。稿の內容は巴里に於げる學窓の一報に過ぎない。只た氣付きたる點に於て自分が先きに滯留せし獨英に於ける學窓所感の一端を對比することゝした。固より論旨文詞共に有用のものとは信し無い。單に先輩并學友諸賢の笑覽に觸るゝこともあらは以て幸甚に感するものである。

巴里大學の組織の概略と最近の狀勢とを語るなれば當大學は所謂綜合大學の制を成し次の部門より成立して居る

（イ）法科　La Faculté de Droit
（ロ）醫科　La Faculté de Medecine
（ハ）理科　La Faculté des Sciences
（ニ）文科　La Faculté des Lettres
（ホ）高等藥學校　L'Ecole Supérienre de Pharmacie
（ヘ）高等師範學校　L'Ecole normale Superienre

右部門は各別個の歷史を以て發達したるものであるから從て其校舍等は市內に散在し一個所に集合して居るものでは無い。只た今日は綜合的に巴里大學と統一せられてあるに過ぎない。

敎授の數は（一九一四年一月現在）法科が四十九名醫科が百拾七名。理科が七十六名。文科が八十七名。高等藥學校が二十二名。總數三百五十一名其他講師の數亦た少く無い。高等師範學校には定給の敎授と云ふものが無い。純然たる高等研究の施設となつて居る（後說對照）。學生の總數は一萬七千三百八名（一九一四年一月十五日現在）であつて其內譯を示すなれば

	男 佛人	男 外人	女 佛人	女 外人	計
法科	六、六三七	八四〇	四六	四六	七、五六九
醫科	三、二四五	五七四	二五七	三二一	四、三九七
理科	一、一七五	二八九	一八四	七〇	一、七一八
文科	一、三二七	四四九	六〇二	六四〇	三、〇一八
高等學藥校	五六二	一三	三一	—	六〇六

以上述ふる敎授學生の數は何れも戰爭前の計表に據つた。從て平時に於ける巴里大學の消息を知るに足るのである。戰爭以來は敎授學生諸共に愛國の熱血を提げて戰場に走つたから一時大學は閉鎖せらるゝに至つたが戰爭の永續に連れ稍國內の事般も再び平靜に歸し從軍を免除せられたる少數の敎授は少數の學生を收容して僅かに開校するに至つたのである。然し乍ら現在の學生と云ふのは多くは外國人又は婦人若しくは不具者などを大部分とし佛人にして適齡の靑年などは殆んど其影を認めない。大學の揭示場には出陣中の敎授學生の消息を絕えず報して居る。名譽の死傷を遂げた者の氏名や金鵄勳章の名譽を擔つた者の氏名など高く揭げられてある。殊にバルカン半島に戰局が展開して以來（最近二ヶ月）は演說會其他の爲め校內は殆んど戰氣に滿ちて居るものがある。

右の如き狀勢は獨り佛國の大學のみではない。先年開戰に當り自分が獨逸を立退く際にも伯林大學の敎授學生擧げて戰場に向ふの壯觀を見送つた。亦た英國に於ても今春オックスフォード大學、ケンブリッヂ大學等を訪れた時に戰爭の影響の痛慘であるのを感じた。自分の經驗した範圍では倫敦大學が一番戰爭の影響が少い樣に感じた。然し尙ほ講義の休止せられて居るのも少くない。

歐洲諸大學の狀勢は概ね斯の如きものであらうと思ふが靜かに止まつて研究をしようと云ふ者の爲めには何等の妨もなく（勿論除獨逸）却て刺戟の多い社會事情に觸るゝことも出來るし亦た研究上諸設備の利用には好都合のものがあるから歐洲に學ばんとする人は戰爭の影響などは顧慮することなく來遊せらるゝことを希望する（只だ平時とは異つて學費の點に多少の余分を覺悟す可きことは勿論だ）固より研究の科目にもよるであらうが法律や政治經濟等の學術研究には少しも不便が無く却て學生の少數なるが爲め設備の利用には都合が好い。

尙ほ巴里大學の法科の概略を語るなれば該科は純法律學科の外に政治經濟科をも包含するのであつて一般の修業年限は三ヶ年に區分せられてある。其講義は極めて簡單に濟して居る。由來歐洲諸大學の講義は至て簡單なるものであるが當大學は殊に簡單である。伯林や倫敦の大學よりも簡單に濟まして居る。其代りに高等研究科に該當する施設が巴里大學に於ては特に發達して居る。或は實習的に或は國家試驗の準備の爲に或は學位試驗の準備の爲めに其他種々なる研究協會などがあつて夫々と高等研究の施設が整備して居るとは伯林大學以上であると思ふ。序乍ら目下法科に於て熱心に研究に從事せられて居る二三著名の學者の氏名を通するなれば（Capentier氏（私法學者）Meisz氏（公法學者）Poittevin氏（刑事法學者）Geonffre De Laprradelle氏（經濟財政學者）其他十數名何れも世界的の大學者が留守大學の敎番として平時に於ける數倍の精力を傾注して伯林大學を凌駕しようとする殆んど敵慨的競爭研究をやつて居る。

述ふる迄もなく今日の戰爭は一刻たりとも學問の研究を停止することが出來ない。所謂晩近の文明戰爭は各般の文明の結晶力を以て相戰ふものであつて原始的な體力や氣力（愛國心）丈けでは戰爭に勝ち得るもので無いと云ふことが益明瞭に證明されつゝある。然れど國防の緊急は如何ともすることが出來ないので敎授學生諸共廢學從軍、新進有爲の學者が屢戰場の露と消ゆるは學界の爲め痛嘆に堪へないものがある。玆に於て歐洲戰爭と學問の消長とに就き一の觀測を立つるの余地があるのである。若し此戰爭が近時英佛側言論界の主張するが如く非常に長く續くものとするときは戰爭に直接緊要なる學問は恐ろしく發達するものがあるに相違ない。例へば化學工業の發達である、殊に獨逸は海路物資の輸入を絕たれてから以來は國內の物資を以て國內の要求を滿たすと云ふ（Selbst befriedigung）が國內の定論となつて廢物利用の化學工業が著しく發達して居る樣である、（附化學工業

に就ては各國皆な著しく秘密研究主義を採て居るから工業所有權の國際的保護などは或は戰後に於ても無用のものとなるかも知れない）反之直接戰爭に緊要ならざる學問（例ば文學美術（音樂）の發達は余程停滯するであろうと思はる。經濟學などは純正經濟學よりは寧ろ特種なる時局向の題目の下に應用經濟學の方面研究が盛んである樣に見える。法律學は經濟學との接渉點に就て色々な新研究の發表せられて居るものが少くない。學理研究の方面は稍停留の狀が見える。

要するに歐洲戰亂も既に一年有半を經、而して今後尙ほ何れ丈け長く續くかは何人にも確と豫想に由ないのであるから少くも今日學問の上に及ぼしつゝある影響は一般的で無い。或種の學問は非常なる刺戟を受けて發達し或種の學問は少からず其發達を阻害せらるゝものがある。斯くの如くして歐洲の學問は普遍的な發達をなさずして偏頗的な發達を來すであらうかと思はる。（大、四、一二、一四）

中村博士殿　侍史　　遊佐慶夫

新刊批評

◎御大典紀念 ドン・キホーテ　上下二卷

島村抱月
片上伸共譯

本原書は明治四十四年文部省に於て文藝委員會なるもの設けられ、古典翻譯の事業を計畫したる際、ゲーテの『ファウスト』等と共に其の選に入りたる者にして、其の普及の點に於ては聖書を措き他に匹儔を見ざる古典文學の稱ある者なることは今更言を俟たざる所なり。然るに其の後文藝委員會廢止せられたるに拘はらず、之れが擔當者たりし島村、片上の二氏尙ほ其の翻譯を繼續し、來四月二十三日は作者セルヴンテスの沒後三百年紀念に相當する今日此大翻譯を完成せられ、御大典紀念として茲に之れが出版を見るに至りたるは慶賀措く能はざる所なり。

由來ドン、キホーテと言へば、一概に滑稽的人物の代表者を寫し出されたる者の如く思做さるゝが如しと雖も、これ描寫の皮相を見て未だ其の眞相に透徹し得ざるの見たるべし。滑稽の裡に眞摯と誠實とを認め、可笑味の底に一味哀調の潛めるを看取し得て、初めて人間性一面の深刻を表現せる本書の眞面目を味到し得たりと謂ふべきか。殊に西曆千五百年代西班牙の過渡時代思潮の產物たる本書が、二十世紀の今日恰も過渡期に遭遇せる我國現代の人士に對して諷刺警告の痛切なる者あるべき點は本書の刊行に就いて最も首肯せらるべき所なり。

若し夫れ翻譯の努力勞苦に至つては、上卷九百三十三頁、下卷一千二十九頁の大册子、其の多大なりしことを一般讀者に代つて譯者に感謝の意を表せんのみ。（麴町區三番町、植竹書院發行．定價上卷參圓貳拾錢、下卷參圓貳拾錢）

◎自然論

エマースン原著
片上伸譯

本書はエマースンの『Nature』を譯したもので、內容は序論、自然。便宜。美。言語。訓練。觀念論。靈、豫望。の八章に、卷末別に同原著論文の『自然』一八四一年に公にせられたもの）を添へたものである。して、譯文は言文一致體であるから、難解と言はれて居る原著者の文章を平易に譯出されて些の艱澁を見ない。（牛込神樂坂上南北社發兌、定價金八拾錢）

◎不文律

ドストエフスキー原作
ロ・アーヴイング脚色
坪內士行飜譯

本書は露國文豪ドフトエフスキーの傑作『罪と罰』とを英國の名優ローレンス・アーヴイングが其の獨自の藝術を演ぜんが爲め、自ら脚色改題したる脚本を、其の愛弟として共に作中の人物に扮し英國實演の臺舞を踏まれたる坪內士行氏が、其名と似通ふ聖ローレンスの河底の人となりたる不幸悼むべき恩師追悼の意を以て翻譯せられたる者なりと云ふことに於いて、躍如たる其の面目を窺ひ知るべきなり。敢て我が文壇並に劇壇に推奬す。（牛込神樂坂上南北社發行、定價金八拾錢）

◎人生日訓

文學士　內ケ崎作三郎編

只管日新月步の趨勢に追隨せんとするの餘弊や流れて輕佻浮華の思想感情に沒頭し、質實壯重なる古典教育を閑却し去るの觀ある、是れ現代思想界及び教育界の一大缺陷たり。編者茲に慨す、所あり、東西古典の精髓を集めて人格修養の資と爲さんと試みたるもの、即ち本書なり。且つ之を編纂する、年中曆を德育的に醇化せしめ、一年三百六十五日を凡て人生修養の聖日と見做し、配するに古聖賢の經典格言を以てす。蓋し人生日訓と題する所由なるべし。而して玄を釣り材を採る學說宗派に偏倚せず、苟も人生の教訓たるべき者は東西古今の典籍を探りて遺す所なく、又問々四季二十四候に關する詩歌俳句を挿入して、配列の單調に備ふる所ある等、洵に用意の周到なる者ありて存す。今や我が思想界東西の文化を渾融調和して、將さに世界的新文明の曙光を放たんとする時、此の種東西古典の精髓を打成したる一大寶典を見る最も喜ぶべきなり。若し夫れ寶庫內容の充實豐富を謂はんか、實に一行三十九字詰十七行、九百三十八頁を數ふ。編者勞苦の多大以て想ふ可し。本書の裝釘亦學生、倫理科教員、宗教家、演說家、文章家等の參考書とし、家庭の輪讀書として携帶備付に適すべく施されある、編者用意の存する所を見るべきなり。（京橋區銀座一丁目大日本圖書株式會社發行、定價金壹圓五拾錢）

◎軍國主義

法學博士　蜷川新著

題して軍國主義と云ふも、彼の何事に關しても武力にのみ依賴せんとするの傾向ある近時獨逸流軍國主義の響に倣ふ軍國主義ではない。列國對峙競爭の今日、國家が其の文化、名譽、尊嚴、權利、利益を維持し、且つ之を伸暢せんが爲めには、豫め常に優勢なる軍力を準備し、必要に應じて、猛然として之を動かすべしと云ふ決然たる國民的覺悟あることを要すると云ふの見地より、遠く日本固有の軍國的精神に鑑み、以て我が國民性に適應すべき軍國主義を提唱したるものである。教育ある青年にして動もすれは兵役を忌み嫌ふの色あるもの、絕對平和主義といふ外人の主張を直譯せる議論に心醉する今日の所謂思想家、只管陸海軍備の擴張に故障を述べ或は反對せんとする態度を示す所謂民間政治家等は、依て以て其の蒙を啓くに足るべきである。苟も歐洲大戰亂終局後に於ける日本の使命に就いて考慮する所ある人士は一讀を値する必要文字である。（神田富山房發行、定價金壹圓）

大正五年二月十日印刷
大正五年二月十日發行

編輯兼發行人　東京市牛込區矢來町四番地　田中唯一郎
印刷者　東京市牛込區榎町七番地　渡邊八太郎
印刷所　東京市牛込區榎町七番地　日清印刷株式會社
發行所　府下豐多摩郡戸塚町字下戸塚六百四十七番地　早稲田大學　早稲田大學校友會

天野學長私邸面會日

天野學長は今回特に學生諸子の爲に、私邸に於ける面會日を左記の通り定められ候間此段學生諸君に稟告候也

●面會日

毎金曜日午前十時より十二時まで

大正五年二月

學長秘書

謹告

拜啓寒威甚しく候處益々御清適奉敬賀候陳者今回本倶樂部に於て左記之通會長面會日並に定設各集會を相催し候事に協議仕り本月下旬より實行可仕候間何卒御來遊被成下度此段御通知申上候　敬具

大正五年一月

東京市麴町區內幸町一丁目五番地

早稲田倶樂部

電話新橋三六一番

○會長面會日　毎週水曜日（自正午至午後一時）

（兼て午餐會を相開き候間御參席の諸君は食事の都合有之候に付前日迄に端書若くは電話（新橋三六一番）にて御通知被成下度候）

○定設集會日

會名	集會日	委員
圍碁會、將棋會	毎月一日。十一日。二十一日（自午後一時至午後十時）	山澤俊夫君
觀世流謠曲會	同　二日。十二日、二十二日（自午後四時至午後十時）	渡邊亨君
寶生流謠曲會	同　三日。十三日。二十三日（自午後四時至午後十時）	田中四郎左衛門君
發句會	同　十日、（自午後四時至午後十時）	黑川九馬君
書畫觀賞會	同　二十三日（自午後一時至午後五時）	坪谷水哉君
茶話會	同　二十八日（自午後四時至午後十時）	山澤俊夫君　上原鹿造君　東儀鐵笛君

運送ナラモデナ共通組

電話番町三四二八番

汽車汽船積貨物直扱

牛込早稲田大通郵便局側　共通組本店

山手線目白驛　第二荷扱所

小石川櫻木町（江戸川橋際）　第三荷扱所

牛込鶴巻町四百二十六番地　第四荷扱所

府下戸塚町（小學校表門前）　第五荷扱所

麴町區飯田町五丁目九番地　第六荷扱所

牛込簞笥町（山伏町停留場）　第七荷扱所

小石川江戸川町（大曲停留場）　第八荷扱所

牛込鶴巻町（山伏小學校筋向）　第九荷扱所

牛込矢來町廿二（消防署筋向）　第十荷扱所

牛込區余丁町十九取引店　南運送店

麻布材木町停留場取引店　柳原運送店

發行數
廿五萬

一個月
大割引
十八錢

▽東京毎夕新聞は＝最新式編輯法に基き紙上の精華目を奪ふ
▽東京毎夕新聞は＝通信機關世界に遍ねく材料豐富山の如し
▽東京毎夕新聞は＝十二博士を社友とし名流多數其局に當る
▽東京毎夕新聞は＝夜の新聞を發行し夕刊後の事件を速報す
▽東京毎夕新聞は＝改善寸刻を怠らず幾多新計畫眼前に横る

大正五年一月

東京市日本橋區蠣殼町一丁目三番地

東京毎夕新聞社

早稲田大學生募集

大學部		
高等豫科		
政治經濟學科	大學部三ケ年	
法學科（國法、英法）		
文學科（哲學、英文學、史學及社會學）		
商科	高等豫科一ケ年半（四期に分つ）	
理工科（機械、電氣、採礦、建築）		

高等師範部		
第一部	國語漢文科	豫科 本科三ケ年 豫科半ケ年
	英語科	
第二部	數學科	三ケ年
	理化學科	

●高等豫科各科第一期●高等師範部第一部豫科、第二部一年中學程度諸校卒業生は四月中無試驗、其他は三月十五日（水）午前八時入學試驗。●高等豫科理工科は前記諸校本年及び昨年度優良卒業生に限り學力銓衡の上四月十三日（木）まで無試驗（期日前と雖も滿員の節は無試驗扱謝絶、其他は四月一日（土）午前八時選拔試驗。●尚ほ詳細は各科事務所に照會せらるべし、●規則書入用の向は郵券三錢封入の上請求せらるべし。

大正五年二月　東京　早稲田大學

早稲田工手學校生徒募集

◎規則は二錢郵券を要す

▲機械科▲電工科▲建築科（第一學期、第二學期、第三學期、第四學期（專門科）
▲採鑛冶金科▲土木科

二月十二日授業開始

◎本校は專ら中等技術者卽ち技手、職工長養成の爲めに設置し實習實驗室及機械標本等は大學理工科の設備を共用す

◎修業年限二ケ年半（五期に分つ）◎授業時間　午後六時より　同　九時まで

◎二月中入學許可◎入學資格尋常小學卒業者は第一期に高等小學卒業者は第二期に中學卒業者は第四期に無試驗編入す

東京牛込早稲田　早稲田大學附屬　早稲田工手學校

大正五年二月十日（毎月一回十日發行）